
アウグストゥス

T・K

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

アウグストウス

【Nコード】

N 8 6 4 7 B

【作者名】

T・K

【あらすじ】

ヴァンは歌う。畏敬と憧れ、そして自分もかくなりたいという願いをもって、“尊厳なる者”の物語を。そして時が経って成長したヴァンは、幼いころからの夢を追い始める――

幼年期に――英雄譚、そして少年の夢――（前書き）

何度も書き直してすみません。どうしても以前のままだと行き詰ってしまつたため、一部の設定は残しつつ、展開や作品の雰囲気も全部変えて新しく始めることにしました。

それとこうした関係で、外伝として作つたものは削除することになりました。ご了承ください。

幼年期に――英雄譚、そして少年の夢――

ヴァンはどこにでもある農民の家に生まれた。

父の名はグランツ。母の名はマリア。祖父や祖母もいたが、別居しているようであり会う機会はなかった。

彼等の家がある村は、これもさほど大きいわけでもなく、大した名産があるわけでもない、ごくごく普通の村だ。季節の変わり目に行われる祭りや行事で賑やかになることはあるものの、普段聞こえてくるのはどこの村でもあるものだ。

つまり人々の声と、そして自然の奏でる音。目にするのも農作業をする農民の姿と、自然の移り変わる様である。

暖かい陽光と黄金色に光る麦のざわめき、畑を耕す強牛ホーンの鳴き声や舞い散る雪のきらめきはヴァンにとって馴染みの深いものに自然となり、家族と周りにある豊かな自然の実りに囲まれて、すくすくと育っていった。

寒さが強い土地であり、春が近づいてきているといいながら、その時は依然寒さが村に残っていた。

その寒さを防ぐために、布を重ねて作られた衣服。それに身を包んだヴァンは、艶やかな黒髪と愛嬌のある顔立ち、どんな人間でも虜にさせる好奇心に満ち溢れてくりくりと動く瞳であたりを見回しながら、色濃く残る寒さにもめげずに日々を元気いっぱい過ごしている。

今、ヴァンは村の中をかけていた。顔にはこれから自分がすることへの楽しみで満ち溢れている。

「こんにちは、ヴァン。今日も元気だね」「こんにちは、おじさん」「おや、ヴァン。今日はどうしたんだい？ そんなに急いで」「うん、父さんたちの手伝いが終わったから、ちよつと行きたい所があるって抜けてきたんだ。あ、でも父さんたちには僕がここを走ったって言わないでよ！」「まあ、秘密の用事ってことかい？ ぶ

ふ、分かったよ」

時折すれ違う近所の人間や村を守る自警団の人間に声をかけられ、元気よくあいさつをしながらヴァンは駆けていく。

両親と見守る人々から惜しみない愛情を受けて育ったヴァンは子供特有の奇怪な行動、子供のときに誰にでもあった何も知らないことから来る突飛な行動だ、をよくして両親に何度も叱られて落ち込んだ。

しかしお叱りの最後にくれる抱擁と「愛している」の言葉で暗い気持ちなど吹き飛んでしまうのだ。もっとも、そのせいでよく反省しないで同じ事を繰り返してよりこっぴどく起こられることもあるのだけれど。

そして両親にそういった行動で心配をかけながらも、ヴァンも惜しみない愛情を向けてくれる両親を愛していた。

その日も両親がやっている農作業を手伝ってきたばかりだった。

ヴァンは現在八歳。子供とは言え大人の手伝いはある程度できる頃で、彼もまた、六歳になったときに両親から農作業の手伝いをするよう言いつけられ、手伝うようになっていた。

もっとも、農作業を手伝うといってもただモミを運んだり麦穂を刈り取ったりといった作業をするだけではない。ヴァンは、彼の両親ですらもできない事をしていた。

少し時間はさかのぼる。

ヴァンはその時、今年の麦を植える農地まで来ていた。隣にはヴァンの父、グランツの姿もある。

グランツは目を閉じ、意識を集中しているようだった。そしてしばらくの時間がたった後に目を開け、納得したかのように頷いた。

「ふむ、どうやらそれほど場の力も乱れていないようだ。去年この農地は休ませておいた甲斐もあったな。……これなら使っても構わないだろう」

「じゃあ、父さん」

「ああ、使っていい。ただし、制御は慎重にな」

「分かつてる」

父の許しを得てから、ヴァンは父と同じ様に目を閉じ、意識を集中させた。

すると突然、場の空気が変わった。

といつても、人の作り出す雰囲気といったものではない。世界のありようが変わったとでもいうのだろうか、世界を構成するそれぞれのものが変化してきている。だが、この世界の変わりようは自然のものではない。余りにもその変化は統一されすぎている。何かがこれらの変化をまとめる意思が、作為的にこれを成しているのは疑いなかった。

そしてそれは、目に見える形でも現れることとなる。

ヴァンの目の前に広がる農地に、何やら輝きを放つ、文字らしきものが渦巻き始めたのだ。

文字の群れは輝きながら、形を変えながらその場所にあるものを作り変え始める。それらに表された変化は一つの意思に従い、ゆっくりと、しかし確実にその意思の望む世界の在り様を作り出そうとしていた。

魔導、これこそが眼前の光景にある力の名である。

それは自身の意思によつて世界を解析、介入し、尋常では有り得ざる事象を呼び出して行使する法のことだ。これをいつ使えるようになったのか、それは誰にも分からない。一説では古代に起こった繁栄の時代である“光輝の世紀”よりはるか古の時代、世界を作り上げた神々が残した創造の法の残骸というが、定かではない。

だが起源には多くの謎が残るものの、ともかく使えることは事実であり、これを用いて人々は発展してきた。

魔導は多くのことを助けてくれた。

火を扱って鉄を打ち、水を扱って作物を作る。風を読んで世界の移り変わりを知り、地を読んで大地の息遣いを知る。

事象を読む力であり、事象を操る力でもあったこの力は人々の目となり、耳となり、手となった。

グランツが使っていたのは事象を探る力、『^{リーディング}読解』であり、それでもって農地の状態を調べていたのだ。そしてヴァンが使っているのは、事象を操る力、『^{コントロール}操律』である。

その力が今、世界を作り変えながら具現化していく。世界を変化させようとする意思、つまりヴァンの意思。それは魔導を通し、彼の目の前にあった農地に多くの細かい割れ目を作っていた。

手作業や強牛でここまでの規模の土を耕すとなると、多くの時間がかかったであろうことは想像に難く無い。しかもこれだけ細かく地面に割れ目ができているのなら耕すことだって苦勞をしなくて済むし、種を植える作業に移るのもすぐにできるだろう。これらは全て、魔導を使ったからこそできたことだった。

魔導を制御する緊張が解け、ヴァンは思わず「ふう」と安堵の吐息を漏らした。そこにグランツが近づき、ヴァンにその影がかかるまで距離が縮む。

「よくやった。偉いぞ、ヴァン」

そしてそう言うってから、しわが浮き上がってきた手で頭をなでてくれた。最近増えてきた白い髪としわを刻んだ父の顔には、微笑みが浮かんでいる。

くすぐったそうに目を細めながら、ヴァンはふわりとした暖かさと嬉しさが胸に溢れるのを感じていた。この瞬間が、ヴァンはとても好きだった。

だから、ヴァンは

「しかし、いつもすまないな。ヴァン」

「え？」

手では鋤を扱って背を向けたまま、自分に謝る父の言葉が理解できなかった。父の扱っているものと違う、小さな鋤で農地を耕していたヴァンの手が止まる。

父は苦澁を声に滲ませて、話し始めた。

「お前には苦勞をかける。私も、お前みたいに操る方の魔導ができれば今みたいな負担をかけることも無かったのに……」

「……」

「お前に手伝ってもらっているのはこちらとしても助かっているし、もし俺の後を継いだときには必要になってくることだから、今のうちから経験しておくのは、私の押し付けかもしれないが、いいことだと思っている。しかし、作業が楽になるとは言え、魔導を使わせる負担までお前にかけるのは……」

そこで言葉を切る。しかし後の言葉を口にしなくても、もう言いたいことはヴァンには分かっていた。分かったから、ヴァンは

「……ううん、そんなことないよ」

と言つて、父の言葉を否定した。

驚いた顔をして自分を振り向く父を見ながら、ヴァンは辺りに広がる農地と自然を見渡した。

ヴァンを包んでくれる豊かな自然。しかしそれは、いつも彼に優しいわけではない。

時には天候が悪く、不作のときもあつて家族そろつてひもじい思いをしたことがあつた。

幸いここらを治める領主は民の話に耳を傾けてくれる人間であること、そして、今の平和な時勢のためにそう無茶な税の取立てをされることは無かつた。だが、自然の厳しさが突然降りかかってくるのは事実なのだ。

（僕は良くて、大好きな父さんと母さんが苦しむ顔を見るのは嫌だ……）

そんな考えが、ヴァンにはある。

だから、ヴァンは両親の仕事を手伝つた。それは彼等に言われたからではなく、自分の意思でだ。自分の力で両親を支えることができる、それは大きな喜びだった。

魔導を覚えたのも、その考えに由来していた。

ヴァンが暮らしているような村には、魔導を初歩の部分ではあるが教えてくれる学校のような場所がある。五歳くらいになったときから村の子供はそこに通い、基本的には家の農作業を手伝うために、

例外的には学者を目指したり魔導士を目指したりする。

ヴァンはその学校で、読解は経験の差から父には及ばないものの、操律の魔導は群を抜いて巧く扱えるようにまでなり、大人が操るものと比べても遜色ないレベルにまでなっていた。

同じ学校の人間から天才だとか言われたこともあった。しかし、そんな評判などヴァンにとっては重要ではない。どれ程両親の力になれるか、それが重要なのだ。

そう思うから、ヴァンはにこりと笑いながら、

「だって、僕は父さんたちが大好きだし。父さんたちが喜ぶなら、僕も嬉しいんだ」

グランツぐらいの年になってくるとそうそう言えないことを、さりとて言つてのけた。

あまりにストレートな言葉に、ヴァンを叱ったときは「愛している」と言うものの、普段はそれほどそういった事を言わないグランツは一瞬どうすればいいのか分からなくなったようだ。

幾分かの時間を置いて、何とかグランツは「いや……まあ……す、すまん……」と、所々を途切れさせながらなんとか言った。顔もどことなく赤くなり、しどろもどろなその様子におかしさがこみ上げてきてくすくすとヴァンは笑った。しかし少しの間笑った後で、その顔に影が差す。

「それに……」

「？ それに？」

「……いや、何でもない。ごめん父さん、途中まで言いかけて終わっちゃって」

口ごもるヴァン。そのことが珍しいのか、まじまじと息子の顔を見ていたグランツだったが、話すつもりが無い息子の様子を見て、「話したくないことなのか？」

と問いかけた。

「うん。今は、ちょっと……ね」

「危ないことだとかじゃ、ないだろうな？ いつもみたいな事以外

に、もしそんな事をしていたんなら……」

「それは大丈夫。僕は何も危ないことして無いよ」

いつもみたいな事はこれからもするかもしれないけど、という台詞は心の中で呟いておいた。

「……そうか、お前も一つか二つくらい、隠し事をするような年になったということか。分かった。今は聞かないでおこう。ただし……」

「分かってる。もし話せるようになったら、きちんと話すよ」

そして、その会話の後二人は作業に戻っていった。

今日の作業は比較的楽で、午前中のうちにヴァンのする役割は終わってしまった。もしかしたら父が今日ぐらいはと大目に見たのかもしれないが、ともかくヴァンは手持ち無沙汰になる。

そこでヴァンは、自分のお気に入りの場所に行くことを思いついていた。弁当は既にもらつてあるし、絶好の機会だと思ったのだ。遡った時間は今に戻り、ヴァンは今、そこに向かって走っていたのだった。

草木の囁きと風の声に耳を傾ける。魔導が使えるからかどうなのかは分からないが、ヴァンはより身近にそれらを感じ取ることができた。読解はまだ良くできないのに、分かるものは分かるのが不思議である。

その導きに従い、ヴァンは周囲に広がる野原を駆けていく。

平坦な地形に均された畑や農園を抜け、生い茂っている野原を抜け、昼であつても薄いぐらい森すらも抜けながら、それでもまだ駆ける。

途中で傾斜づき、何度も休みはさみつつ、ようやくたどり着いたのは、山に生い茂る森の合間に広がっている広場のような場所だった。

そこは森ではなく草むらになっており、穏やかに風にさわさわと揺れていた。また、その中で一部分だけ丘のように出っ張っている所があつた。しかも、かなり大きく出っ張っている。そこが、ヴァ

ンが目当てにしている場所だ。

ここまで走ってきて、さすがにヴァンも息を切らしていた。だが、力を振り絞って何とか目当ての場所まで上っていく。この状態で斜面はきつかったが、後少しと自分を励まして頑張った。

そしてようやく頂上にまで辿りつく。そこには、絶景が広がっていた。

今ヴァンがいる場所はそれほど高くはないが、森の木々が邪魔していないためその高さでもヴァンたちが住んでいる村や、村の先にあるものまで見渡すことができた。寒さが増してくる時期で日の下がりも早くなっており、光に赤みが混じり始めて影も伸びてきていたが、それらの色もある種のはかなさを地上のもの達に与えており、景観を損ねるものではない。

身近に見る自然も美しいものだが、こうして上から見ても身近で見るのとは違う別の美しさが出ていて飽きない。ここに来るたびに、ヴァンはそう思うのだ。

ヴァンは思う存分絶景を楽しんだ。

だが、景色を見渡していると必ず目に入ってきてしまうものがある。

それは、都市だ。ヴァンたちが住んでいる村の先にある、いくつも連なっている丘や山を越えた場所にそれはあった。

あいにくその前にそびえている山のせいで、ここから見える部分は少ない。だが、起伏の激しい山々の合間から覗いているその建物の大きさや規模——中には小さな山を凌ぐ建物もある——から、ヴァンたちが住んでいる村とは比べ物にならないほど大きな都市ということは容易に分かるだろう。

そこは、この時代に生きる人間ならば誰もが一度は訪れたいと思う場所だった。

ヴァンは草むらに座る。腰についている小さなポーチには母が作ってくれた弁当があるが、今は食べる気にはならない。ここに着たからには、自分が勝手に決めたことだが、やらなければならぬこ

とがあるのだ。

乱れた息が整うのを待つ。幾許かの時間の後、ようやく乱れた息が正常に戻ってくれた。そして視界に自分達の憧れの都市を納めて、ヴァンは大きく深呼吸をする。それはあたかも、吟遊詩人が詩を歌う前に声を整えているかのように。

そう。これからヴァンは、詩を歌うのだ。

初めは村に偶然やってきた吟遊詩人が歌っていた。その後、詩を知っているという母に何べんも何べんも、夜の寝る時といった手が空いている時間を見計らって読んでくれるように頼みこんだくらいだ。

今では何も見なくても、全て謳えるようになってしまっている。それくらいに、ヴァンはその詩が好きだった。

穏やかに肌をなでる風の流れに乗せるかのように、ヴァンはその詩を謳いはじめた。

「私は語ろう——」

私は語ろう。この地に起こりし大いなる繁栄を、その栄華を

私は語ろう。この地に起こりし大いなる戦乱を、その悲劇を

私は語ろう。この地に生まれし大いなる英雄を、その物語を

——“尊厳なる者”の物語を

原初に混沌の闇があった

闇は全、しかし無であった。そこには生あるものは無く、また土、水、風、火もまた無かった

あるとき、その静寂を嘆いた神々は混沌の闇に一つの波紋をおこした。それは闇を震わせ、その内にあった全が分かたれて光が生じた。光は闇を裂き、分かたれた混沌を更に裂いていく。裂かれた混沌は世界を生み、世界はその内に様々なものを生んだ。豊穡の源となる大地。恵みと潤いを運ぶ水。風は気ままに二つを世界に巡らせ、火はその三つを温もりで満たす。そしてついに、四つの恩寵によって生きとし生けるものたちが生まれた。

ヴァンには『混沌』や『豊穡』といった難しい言葉の意味は分からない。しかしそれでも、彼は謳い続ける。そんなところを読むために、この詩を覚えていくわけではないのだから。

彼一人の語りは続く。

生まれ出でた彼等は栄えた。

四足のものは大地を思うがままに駆け抜け、羽を持つものは空を自由に飛び回り、ひれと輝く鱗を持ったものは水の中を支配し、火を扱えるものは極寒の大地にまで足を踏み入れるに至った。

そんなあるとき、彼等の中からただ自然に身を任せるだけではなく、自らの意思で操る法を見つけたものたちが現れた。

彼等は見つけ出した法で、自らの繁栄をより確固たるものとした。土を操って大地を自らに住みやすい場所に変え、水を操って渴きをなくし、風を操って遙か遠くに意思を伝え、火を操って暖をとった。いつしかその法は広く伝わり、この世に在らざる魔を導くもの、

『魔導』と彼等はそれを呼ぶようになっていく。そしてそれは彼等に、以前からの繁栄を超える栄華をもたらしていた
おお、見よ。その輝かんばかりの栄華を
壮麗に立ち並ぶ、その巨大な塔と宮殿を
自らを魔導で変え、その力強さに溢れた姿を
飢えの苦しみから解放された、心穏やかなるその笑顔を
繁栄はいつまでも続かのように思われた

歌う技術は稚拙以外の何者でも無い。

母が読んでいた口調をただ真似て、しかも時折使い慣れていない
難しい言葉をつつかえそうになっている。

しかしそれは、ヴァンは懸命に歌っていた。

繁栄が続く中、少しずつ、滅びの影は忍び寄っていた

魔導は生きとしいけるものに栄華をもたらした

だが、それは必ずしも彼等の幸福のために使われるわけではなく、
使ったとしてもその結果が全て善となるわけでもない

いつしか魔導を巧く使える者と、使えない者との間に溝ができ始
めていた

魔導を扱うものは扱えぬものを蔑んで自らの奴隷とし、己が欲望
を満たすために魔導を使うようになっていく

また、魔導を使い続けたことで世界にも異変がおき始めていた。
土を、水を、風を、炎を永きに渡って操り続けた、その結末がやつ
て来たのだ

土は本来の力をなくし、水は流れを変えてそこに生きる命を狂わせ、風は熱と寒さを在りえざる場所にもたらし、炎はその勢いを止めることなく燃え続ける

心あるもの達は、その異変を止めようとし、欲に身を任せる魔導士たちに警告を発する

だが栄華の内に蓄えられた知識と力は彼等を、己が欲に任せて魔導を扱うものたちを、更なる欲望の実現に向けて動かしていた

心あるもの達の警告も無視して、彼等は暴走を始める

そして、ついにその時が訪れた

それは崩壊の時。栄華と光に溢れていた、“光輝の時代”の終焉

ヴァンの声の調子が、少しだけ下がる。この後の部分は、実を言えばヴァンはあまり好きではないのだ。

初めて吟遊詩人から聞いたときには、語りの調子が怖かったこととその時代を生きていた人たちの事を想像してしまったことから、泣き出してしまった記憶がある。

この部分を抜かしてしまうことも考えた。しかし抜かしてしまうとその後の部分を歌うときにどうしても調子が上がらなくなってしまう。

湧き出してくる悲しさや痛みを抑えながら、ヴァンは続きを口にした。

“光”は失われた。そして“闇”が世界を覆っていく

己の欲にとらわれた魔導士たちはその恐るべき探究心により、“光輝の時代”の遺産を用いて強大な力を手に入れた

彼等は秩序を壊し、己が欲をかなえるに都合のいい世界、秩序なき“混沌”を作り出した。力があるものはその望みをかなえ、力なきものはただ彼等の肉となる。それこそが彼等の望みであつた

地獄が始まつた。目を瞑るとも、耳を閉じるとも、“闇”は人々を飲み込んでゆく

魔導士たちによって秩序が壊され人心は荒む。そして荒んだその心は更なる争いを生み、その裏で魔導士たちは自らの欲をかなえるために力なき人々を使い尽くした

日々を過ごすものたちの耳に届くのは、目に映るのはもはや光があつた時代とは違う

響くのは地を這うものたちのひずめと駆ける足であり、映るのは天まで届こうかという業火。戦火は絶えず、撃剣は後を絶たない。父を、母を、子を、友を失つた嘆きは途切れることが無く続いた。流れ出た血はいつしか川すら作り、屍は大地を覆いつくさんばかりであつた

同じ時を生きるものと思う

何故私達は苦しまなければならないのか

何故私達には光が与えられなかったのか

何故私達は——この時に生を受けてしまったのか……

終わり無き戦い、終わり無き絶望が、世に満ちていった

そこまで物語が至ると、ヴァンの声に熱が帯び始めた。落ちていた声の調子も戻ってくる。

彼が好きなのは、ここからだ。

男の子は勇敢な英雄の物語といった、力強さを持ったものに憧れ

るものだ。ヴァンも、その例外ではなかった。そして今歌っているこの詩は、史上最も偉大な功績を残した英雄を謳っている。更にその英雄は今もなお生き、自分達を守っている。

ヴァンはより強く声に力をこめ、再び詩を歌い始める。歌声はどこまでも澄んだ透明な声で、畏敬と、ひたむきな憧れを乗せた調べをしていた。

生きるもの達は願った

この苦しみを終わらせる事を

世界を覆う“闇”が吹き払われることを

再び世界に“光”がもたらされる事を、その日を

ただひたすらに願い続けた

そして——彼が現れたのだ

彼の者の名はゼノン

その身に燃え盛るが如き黄金の髪、美神をも惑わすが如き美貌を宿し、尽きることを知らぬ泉の如き英知、天地を揺り動かすが如き武勇を合わせ持つ。馬手に神々より授かりし聖剣、弓手に偉大なる長の杖を携え、白銀の鎧をその身に纏っていた

勇壮にして壮麗たるその様は、まるで光を放つ日輪が地上に降りてきたかのような

彼に付き従うは四色を司りし四人の王、そして世の戒律を守りし五柱の友

固き絆で結ばれし彼等は世界を覆う“闇”に、それを操る魔導士たちに戦いを挑んだ

それは永く、そして激しい戦いだった

幾度となく魔導士たちより差し向けられる刺客、暴虐を尽くす領主、更には彼等が守る人々さえも時に刃を向けた。長き年月において世界を覆っていた“闇”は、余りに長い年月において人々を苦しめ、人心を蝕んでいたのだ

幾多の裏切り、数多の戦いが彼らを襲い、果てしない憎しみが彼らを傷つけていく

しかしいかなる困難が彼らに立ちはだかろうとも、彼らを止めることはできなかった

困難を越えて闇に挑み続ける勇者たち。果敢に闇の時代に立ち向かう彼らの姿は、しだいに人々を惹きつけていった

“闇”からの解放を願う者、彼等の姿を見て戦いを決意した者、中には自らの業罪を悔やんだ魔導士もいる。ゼノン達の下へとせ参じる人の流れは絶えることが無く、それは人がつくる川とも見えた人々の意思と力を得て、ついに彼等は魔導士たちの長と対峙するに至った

魔導を極めたと称する長は強大だった。彼の操る業火は王達の行く手を阻み、烈風はその体を切り刻んだ。呼び出した激流は友の自由を奪い、大地の震えは彼等を押しつぶす

万の軍勢すらも滅ぼしたといわれるその力は、ゼノン達を圧倒する。しかし、ゼノン達の戦意は衰えぬ

力無き者達の声、“闇”からの解放を願う者たちの声が彼等を支えていた。

そして彼等は、ついにそれを成す

王と友が助け、ゼノンは魔導士の長へとひた走る

長は魔導をもって阻もうとするも、助けによってそれは退けられ、彼の歩みは止まらぬ

そして、ゼノンは長に聖剣を突き立てた

長の断末魔が世界に轟く。強大なる魔導を操った魔力は散り、長

きに渡って世界を操った“闇”が、倒れたのだ

喜びは嘆きに代わり、空を満たす。曇天が裂け、まばゆき光が地上に降り注ぐ。“闇”の終わりを告げる歌声が、世界に響く

英雄となりしゼノン達は生ける者達の願い、そして世界を作った神々の願いを受けて王となる。世界を冠する“天”の称号を戴き、王と友らと共に神々より不老の体を与えられたゼノン王らは世界を安定へと導いていく

皆は彼等を、ゼノン王を讃えた

そして畏敬と感謝を以って、いつしか王をこう呼ぶようになっていった

——“尊厳なる者”（アウグストウス）と

歌い終えたヴァンはしばし、歌いきったという満足感と余韻に浸る。そして、その後に湧いてくる決意をこの詩を歌うことに確かめるのだ。

寒さが増してくる季節のためか、陽は落ちかけるところまで来ていたが、ヴァンは動かない。

彼の目は歌っている間も、歌い終わった今も動いていなかった。夜の闇に備えて魔導による明かりを灯し始める都市を、ずっとヴァンは見ていたのだ。

天都エルザリア。それが都市の名である。

天帝が直接治める世界で最も大きな都市。そして天帝自身も、ここに宮殿を構えて玉座に腰を下ろしている。その様を想像して、（いつか、ゼノン様のようにになりたい）

ヴァンは、こう思うのだ。

勿論農民として生きていくことが嫌なわけではない。農作業は好

きだし、何より父と母を手伝えるから。

しかし詩にでてきた“闇”のようなものが自分達に襲い掛かってくれば、今の幸せなどすぐに消えてしまうようなものではないのかという考えが頭をよぎったとき、彼の中で一つの考えが浮かんだ。皆を、愛する父や母をこの手で守ること。守れるだけの力がなければ、幸せを永いものとする事はできないのだと。

だからヴァンは、自らの手で皆を守れる存在になることを決意し、胸に秘めるのだ。そしてその決意から自然、目指すものが浮かんでくるのである。

（父さん達が好きだから、この想いは譲れない……）
そうヴァンは思っている。

この想いは父や母から反対されるだろう事は何となく分かっていた。今日もグランツに話そうとして口ごもり、誤魔化してしまったが、しかしヴァンが望む道を胸を張って行くためにはどうしても話さなければならぬだろう。もっとも、両親が納得してくれなかったとしても諦めるつもりは無い。

決意を叶えるために。今なお世界を治め、平和を保っているゼノン王を助けるために。

だからヴァンは夢を持つのだ。そう、

（僕は絶対エルザリアに上って騎士になる）

胸にあるこの思いを貫き通せるだけの力を持つために。騎士。天帝の下で忠誠を誓い、高い武勲の誉れをもって人を助ける存在となつて。

陽が落ちていく。空には星が瞬き始めていた。ヴァンの村にもちらほらと明かりが点り始めた。

そろそろ帰らなくては両親に心配をかけるだろう。しかし、ヴァンはそこに居続ける。胸に湧いてくる決意を、もう少し噛み締めていたいから。

結局陽が沈むその時まで、
遙か遠いエルザリアをヴァンは眺め続
けていた……

幼年期に――英雄譚、そして少年の夢――（後書き）

何度も書き直して本当にすみません……区切りが悪かったのだから一つにまとめました。

幼年から青年へ ― 騎士を目指して ―

「だめよ、そんなこと！」

季節は移り変わり、ヴァンは八歳になった。そしてその年の誕生日、騎士を目指したいことを初めて両親に話すと、今まではあまりヴァンを怒らなかつた母のほうが悪かった。

ヴァンを叱るのは主に父の方だったため、これには意表を突かれたと同時に予想を超えた怒りの大きさに驚いた。しかし

「……どうして？」

ヴァンは剣幕に首をすくめながら、しかし精一杯の勇気を振り絞って小さな声で疑問を口にした。

「僕と話した自警団の人は、『この仕事は誇りある仕事だ』って言うてた。自分で自分の大切なものや、皆を守ることができからつて。……ゼノン様の話と、この話を聞いてからずっと、騎士になりたい、父さんや母さん、皆を守る人間になりたいって思ってたんだ」

「……でも守るためといたって、私はあなたに人殺しなんかして欲しくないわ！ そんなことをさせる為に産んだ訳じゃない。もつと幸せに、折角の争いの無い世の中なんだから、平和に過ごしてもらいたいのよ！ —— 自分勝手かもしれないって事は分かっているわ。辛い仕事を他に押し付けて、大切な人を危ない目にはあわせたくないって言うてるんだもの。でも、それでも嫌なのよ！」

母はヴァンの言葉に理解を示すも、しかし負けてはいなかった。声を必死に張り上げ、一歩も引かずにヴァンに真正面から対峙する。「……ヴァン。前に確か、今は話せないと言っていた事があったな。それが、これか？」

すると、今まで黙っていた父が言葉を発した。ヴァンはそちらを向く。父は瞳を閉じ、未だ席に座っていた。

「……うん」

「なら、お前は人を殺す覚悟があるということか？ …… どんなお題目を並べても、戦うことを生業とする騎士を目指す以上、人を殺すことに変わりはない。お前は私達を守るために戦うといった。ならば、お前が戦って人を殺したことで、その殺した人間を大事に思っている人間がいるときはどうする？ それでも、お前は戦えるのか？」

人を殺せるか、そして殺した人間を大切に思うものがいたときどうするのかという父の言葉に、一瞬ヴァンは答えに詰まる。だが顔を上げ、目を開いてひたすらに己の目を見てくる父と向き合った。

「…… 分からない。でも、もし僕が人を殺しても…… その人が僕の大切な人を傷つけるんだったら……」

そこで一旦言葉を切った。

ヴァンは思い出していた。想像で父と母、そして仲の良い近所の人たちがいなくなってしまうことを。その時背筋に走った寒気、恐怖と悲しみは強烈な痛みとなって心に残っていた。…… 思わず、大声で泣き出してしまふほどに。

そんな悲しみを与えるものは、許せない。だからと、ヴァンは言う。

「…… 僕は、その人を殺してでも、僕にとっての大切な人を守りたい……」

例えそれが、その人に恨みを、怒りをもたらずとしても……

そのヴァンの言葉に、しばらく父は黙っていた。母はヴァンの言葉に声を無くしている。

そしてやおら椅子から立ち上がると、奥に言ってしまう。それからまたしばらくの時間がたつと戻ってきた。しかし、戻ってきたグラントの手にはさっきまでなかったもの、二振りの木剣が握られていた。

木剣を見たヴァンは驚きを顔に張り付かせて父を見、母はやはりというように俯き、唇をかんだ。

「父さん！ それは……」

「お前の覚悟は聞かせてもらった。その意思を貫けるのなら、私から言うことは何も無い。……私がこの村に住むまでは、剣士として食べていたことは知ってるな？」

「え？ う、うん」

「いつだったか、父と母の馴れ初めを聞かされて確かそんな事を言っていた。」

「明日からお前の稽古をつけてやる。農作業が終わった後と、天の日の午後に私のところに来るといい。なんの功もあげて無い剣士だが、基本くらいは教えられるだろう……ただし」

「？」

「やるからには、本気でやらせてもらうぞ」

——次の日から、訓練が始まった。

「違う！ そこはこう動くんだ！」

「え？ こ、こう……？」

「そうだ。その次は……」

まずは剣を構える型を覚えるところから始まった。

上、中、下と、それぞれの段でどう剣を構え、どう動けばいいのか。そしてその構えからどう攻撃し、どう守ればいいのか。その基本的な動作をグラントは徹底的にヴァンに教えていった。

それが終われば実際に剣を振るわせ、時には父自身が稽古をつけた。

本気で、と父が言ったとおり、その教え方も厳しいものだった。

隙があれば見逃さずに容赦なく突いてくる。その上常に限界近くまで体を酷使させられる。

「まだ動作が遅い。そんなざまで実戦に出れば、すぐに殺されるぞ！」

「く……う……！」

想像以上の苦しさにヴァンは、しかし、辛いと思いつつ、むしろそういった父のやり方に当然と思ってしまっ自分がある事を自覚していた。

父は自分に厳しく、そして常に生活の中で己を磨く事に余念が無かった。

母と結婚して農民となり、剣を置いたといっても、父は自分自身の剣の稽古を毎日欠かさずに続けていることをヴァンは知っている。それに常にヴァンを叱ったとしても、その上で自分が叱るだけの資格を持っている人間たらんとしていたことも、子供心ながら知ることができた。

領主、そして自警団が守ってくれるといっても、いざというときに頼れるのは自分達だけと言っていたときがある。それを忠実に守っているのだとヴァンは知れた。

農作業の合間、休みの日を使って、グランツは自分が覚えている全てをヴァンに教えていった。ヴァンは歯を食いしばり、体の悲鳴を無視してひたすら稽古に打ち込んでいった。

初めてヴァンが騎士になりたいといったときに反対していた母は、どうしてもヴァンがその心を変えないこと、そして生半可な覚悟で言っているわけではないことを知って、ようやく認めてくれた。

「でもね、ヴァン。これだけは忘れないで」

そして認めてくれたとき、母は同時にこう言うのだった。

「いつか戦うことに疲れたり、人を殺すことに嫌気が差したりしてきたなら、いつでもここに帰ってきなさい。もしかしたらあなたを怖気づいたと言って笑う人がいるかもしれないけど、でも育ててきたんだから良く分かる。——あなたは優しい子。優しいから私達のために戦いたいって思ったのも分かるけど、でも戦うことになったらあなたの心は絶対に傷つくわ。だから何と言われても、帰りたくなったら帰ってきて、そしてここで心の傷を癒しなさい。ここはあなたの心が生まれて育った、故郷なのだから」

「……うん、分かった」

自分への思いやりに溢れた言葉に少しだけヴァンの視界が滲む。

気恥ずかしかったのでそれを気付かせまいと横を向くのだが、そんなヴァンを母は微笑を浮かべて抱きしめるのだった。

……やがて更に月日が流れ、十二にヴァンはなった。

「やあああああ！」

「甘い！」

今日も今日とて、ヴァンは稽古を続けていた。

掛け声と共に木剣を振り下ろすヴァン。それをグランツは難なくかわし、逆に振り下ろしながら空きになった脇を狙って木剣を横薙ぎする。だがヴァンは体をひねって何とかかわし、更にひねった方向に向かって足に力を入れて跳び退った。

季節は夏を迎えていた。

照り返す日差しは高く、はつきりとした陰影を大地に映している。日差しによって暖められた空気は自然にしているても汗を流すほどであり、生地が薄く熱を逃がしやすい服を着ていても余り効果が無いようであった。

そんな中で、二人は稽古をしている。

ヴァンもかなり動いたせいか息が上がってきているが、まだ動けそうだった。

（少しは、この辺を駆け回ったことも役に立っているのかな）

ふと、そんな考えが頭をよぎる。小さいころからここらを走り回ってきたのだ。意外に体力もついており、しかもより長く動くために体の動かし方、呼吸も疲れが出ないように工夫してきた。それらを応用したちょこまかとした動きは、父相手でも多少は通じているようだと言っている。

身長も少しずつ伸びてきており、まだ子供相手ということではグラッが手加減しているといってもその攻撃を受け止められるくらいには力がついてきて、加えて相手の力を受け流す術も身に付けてきていた。

上達している。その実感が僅かだが、確実についてくる。そしてその実感は自信を呼ぶ。

ついてきた自信を乗せ、ヴァンは息を吸い、再度掛け声をかけた。
「行くよ！」「おう、来い！」

掛け声を掛け合った後、再度ヴァンが駆けてグランツに木剣を振るい、それに合わせてグランツも剣を振るった。

カツ、カツと木剣を打ち合わせる音がしばらくの間続く。

真上から振り下ろされようとした剣は突然軌道を変え、グランツの横腹を狙って伸びてゆく。最近ヴァンが覚えたフェイントの一種だ。しかし覚えて間が無いのか、その技にはいまひとつ切れが無い。案の定グランツに受け止められる。しかも逆に木剣同士が触れている所を支点とし、ヴァンの剣を弾き飛ばそうとしてきた。力がこめられ、父の腕の筋肉が盛り上がる。

だが、それこそがヴァンの真の狙いだった。

「何!？」

グランツの目が見開き、驚きの声上がる。

弾き飛ばそうとした瞬間ヴァンは剣にかけていた力を抜いて衝撃を受け流し、グランツの逆襲を避けて見せたのだ。

そして今、グランツの体制は剣を跳ね上げた状態で動きが止まり、下半身がから空きになっている。力の流し方を覚えてきている事を知っていても、ここまで巧く決められるとは思っていなかったのだらう。

その隙を逃さず、ヴァンは一撃を与えようと踏み込む。自分でも満足のいく踏み込み。まるで“光輝の時代”にあった瞬間移動の魔導でもしたかのようにヴァンの体が一瞬消え、グランツの近くに現れた。剣はその勢いを借り、速さを保ったままグランツに迫った。

やれる！ ヴァンがそう思った、まさにその時だった。周囲の空気の流れが変わり、光り輝く文字がヴァンの眼前に現れる。

そのことに気付き、まずいと感覚が警報を鳴らすも既に遅い。変化した空気は操る者の意思に従って形を変え、その者の望む形、空気の壁を作り上げた。そしてそれが押し出され、ヴァンに直撃する。

その衝撃をともに食らい、しかも自分で踏み込んだ分の勢いも加えられてたまらず後ろにたたらをふむヴァン。その間に体勢を立

て直したグランツはヴァンに近づき、剣を握っている手を打ち据えた。

「ぐっ！」

痛みに剣を取り落としそうになる。しかしそこで踏みとどまり、剣を持っていない手を添えて何とか落とすことだけは避けられた。同時に後ろに跳躍して再度距離をとった。

（しまった……魔導の事をすっかり忘れてた……）

追撃が無いことに安心するが、しかし自分の迂闊さにヴァンは顔をしかめた。何が上達してきたか。戦いの中で、敵が魔導を使うことも考えの中に入れて置けと教わったのに！

先程打たれた腕には、まだしびれが残っている。息も切れ切れだし、汗も滝のように流れていた。しかも先程までの攻防で隠せないほどにそれが大きく、そして大量に流れるようになっていた。

そろそろ限界が近づいてきていることはヴァンもわかっていた。しかし、ヴァンにも意地がある。多少は勝ちを得られるようになってきたとはいえ、まだ負ける回数の方が圧倒的に多いのだ。

今日もこのまま父から一本を取れないのは悔しい。

（せめて一本だけでも……！）

そう思った、その時だった。グランツが剣を下げ、ヴァンに

「少し休憩を入れよう、ヴァン。さすがにこれ以上は無理だ」

と声をかけてきた。

「……え？ でも……」

「そうやって闘志を失わないのはいいことだが、これは稽古だ。限界近くまでやるのはいいが、それを超えてやってお前が倒れたりしたら何もならん。なに、今日はまだ時間がある。焦る必要など無いさ」

渋るヴァンを、グランツはそういつて納得させるのだった。

幼年から青年へ ― 最近の出来事 ―

グランツは疲れきっているヴァンを木陰に連れてきて座らせた。座っていることと、木陰の涼しさ、そしてヴァン達の周囲にある麦畑をかかさど涼やかな音を立ててそよがせる微かな風が体を冷やす。

それらのおかげでようやく汗が引いてきたとき、

「そういえば、ヴァン、最近の学校の調子はどうだ。もう慣れたか？」

と、隣に座っているグランツが聞いてきた。この春からヴァンは今までの学校を卒業し、その才能を生かし、もといた学校の教師から推薦を受けたこともあったのだが、魔導士を目指す子供が本来行く、本格的な魔導の修得ができる場所に通うようになっていた。

しかも今までは天の日と言う休みの日にしか通っていなかったのが、今では隔日の間隔で通うようになっていく。もっとも、農作業を手伝えなくなるときがあつて両親に苦労をかけているという面があるのも事実だったが。

そしてそのためか、

「いいと、思う。魔導もちゃんと修得できてるし、これまで習っていなかったところにも手を伸ばし始めたから、教えてもらってる内容にも慣れてきたと思う。農作業だって魔導の修得のせいで手伝うのに間を空けちゃってるんだし、苦労をかけてる分は絶対に取り返して見せるよ」

語気を強めてヴァンが答えるのだった。すると、そこで父はなぜか苦笑を浮かべた。

それを疑問に思いつつも、話を続ける。

「……そうか。しかし、まだ戦いで使うことはできないか」

「うん、まあね。父さんみたいに自分の得意な系統を絞って学んで、早く術式を完成させることができればいいんだろっけど……」

先程の失態を思い出したのか、ヴァンの声に悔しさが混じった。魔導は彼等の生活を助けると共に、当然のことながら戦いにおいても重要な役目を果たしていた。

先程のグランツがやった事はそのごく一部だ。グランツが操ったのは周囲の空気だが、他のもの、例えば炎や、もしくは水でもいいだろう。そういったものを操れば、距離が離れている相手にも攻撃をかけることができるようになるのだから。

しかし、魔導を戦いの場面で使うには避けられないものがある。

「……いつそ僕も絞って学んだ方がいいのかな……そうすれば術を完成させられるのだって早くなるだろうし……」

ポツリと呟くヴァン。声には、焦りと不安がある。

そう。つまり、魔導の術式を完成させるまでに時間がかかることだ。しかもただ時間がかかるだけではなく、術式の完成に意識を集中しなければならなくなるため、攻撃や防御を満足にこなせなくなる恐れがある。下手をすれば、それが致命的な隙を作ることにも繋がる危険もあった。

そのためヴァンが言うように、戦士といった戦いを生業とする者は、修得する魔導を自分が最も操りやすいものに絞るのだ。そうすることで術式の完成を早め、グランツがやったようにとっさの場面でも使えるようにしている。

ヴァンもそういった魔導の戦いへの応用をしようと頑張っているのだが、魔導の修得の順調さとは裏腹に遅々として進んではいなかった。そのため先程のような感情が出て来たのだ。

しかし、グランツはヴァンの呟きを聞きつけたのか

「それはまだ早いといっただろう」と言ってきた。

「でも、今のままじゃ……」

「前にも言ったが、お前くらいでそこまで魔導を修得できているほうが凄いと思うぞ。私のように絞ってしまうのも手だが、まだお前には時間がある。系統を絞る前に、学べるところは学んで自分のも

のにしてしまえ。もしかしたら全系統を使えるようになるかもしれないし、そうすることで自分の手を増やせるのなら尚更だ」

「……」

「今だつて『魔導の修得はちゃんと進んでいる』といっただろう？ それならやれる所までやってみるといい。折角の学べる機会を無駄にするのもなんだし、焦るに不安を感じるにもまだ早すぎる。私達の心配はありがたいが、それは要らん心配だ。気にしないで、しっかりと学んで来い」

力強く、そしてヴァンの思いを見透かしているかのように言う。その力強さに、ヴァンは浮かび上がりつつあった焦りと不安が取り払われていくのを感じていた。だから、

「……うん、分かった。じゃあもう少し頑張ってみるよ」
父の言葉に、しっかりと頷くことができた。

「それがいい。様々な場面を想定して、どういった魔導を使って、どういった手を打てるのか、そういったことまで考えておくことだ」
「うん！」

今度は元氣良く答えられた。それを見て「よし」と父は笑みを浮かべながら頷いた。

「……あ。そういえば父さん」

そこで一つヴァンの脳裏に思い出されたことがあり、父に声をかけた。

「ん？ どうした。まだ不安なのか？」

「ううん、そういうんじゃないくて、その、大したことじゃないんだけど……さっきはどうして笑ってたのさ」

「さっき？ ……ああ、もしかして、お前が魔導の修得について言っていたときか？」

「そう、それ。あの時僕、何か笑われる様なこと言ったっけ？」

「違う、そうじゃない。……やっぱり分かっていないんだな」

「？ 何が？」

どうにも言っていることが分からず、首を傾げてしまふ。

「さつきいった最近の学校の調子がどうかということだ」

「え？ そのことならさつき……」

「まずまず首をひねるヴァン。答えたはずじゃ、という前に父がそれに重ねるように言った。」

「魔導の修得具合も後で聞くつもりだったが、しかしさつきのはそういつつもりで聞いたわけじゃあない。私も言葉が足りなかったのかもしれないが……最近の学校の友達とか、そういったことはどうかというつもりで聞いていたんだ」

「……あれ……そうだった、の？」

「よほど意外だったのか、のろのろとヴァンは問い返した。心なしに、顔が赤くなってくる。質問を取り違えたことが恥ずかしいのだから。」

「そうだ。しかしすぐに魔導のこととなるとすぐに戦いだとか騎士のことと結び付けて考えるのは、まったく真面目というか何というか……」

「くく、と父は笑いを漏らす。笑いながら言われてヴァンはますます気恥ずかしくなり、顔が周りの暑さとは別に更に赤くなるのを感じていた。」

「な、何だよ……それならそうと、はっきり言ってくればいいじゃないか……」

「思わず、拗ねた声が出る。」

「いやなに、魔導の修得具合も聞くつもりだったといたただろう。別にこつちから聞いても構わないかと思っただから黙っていたただけだ。順番が逆になっただけで別に不具合があるわけじゃない」

「それはまあ、そうだけど……」

「釈然とせず、憮然とする。何か反撃でもしようかとヴァンは思うが、父の様子を見るにこつちの反応を見て面白がっているようにも感じられる。それが妙に悔しかった。しかも、

「それは私も聞かせて欲しいわね」

「母さんまで……」

そこに母まで現れ、こんな事を言ってきた。知らず、また拗ねた声を出してしまう。

声に含まれた不満を聞き取ったのか、母は不思議そうな顔をして言うのだ。

「あら、不満そうね。聞いちゃいけない？ 折角お昼ご飯も持ってきたのに」

そして手に提げている木で作られた手籠を前に出し、開ける。中には肉や野菜をつめたパンが並んでいた。

思わず、つばを飲み込むヴァン。先程まで激しく動いていたこともあってか、いつもより大きな音が出た事は自覚していた。

「……母さん、これをあげるから話せ、とか言うんじゃないよね？」

「あら失礼ね。そんなつもりは無いわよ。こここのところ学校のお話はしてなかったし。ヴァンを見た感じ、余り問題は起こってないと思うけど、でもやっぱりお話しないと分からない部分もあるからそういつてるだけよ」

もっともらしい、しかも納得できるような理由を並べ立てるが、顔が笑っていた。その上同じ様に手籠を覗き込んでいた父まで話に乗ってくる。

「ほう、パンも美味そうだし中々にいい案だな。……確かに、丁度昼も過ぎたあたりだ。ここで昼食を取るのも悪くないか。ついでに」
「僕の話を聞くなって言うんでしょ。まったく……」

ヴァンはぶつぶつ言いながら、ついに降参した。

「分かったよ、喋る。別に隠しておくことでもないし……あ、母さん、ここに座りなよ」

「ありがと、ヴァン」

木陰の中に母が座れる分だけのスペースを空ける。そうして母が座り、皆がパンを食べ始めたところで話し出した。

「魔導の修得はさつき父さんに話したとおりだから、問題は無いと思う。母さんは後で父さんに聞いておいて。周りの人とは……多分、うまく付き合えてると思う。皆とはそれなりに話せてるし、嫌いな

人も、それに意地悪してくる人もいない」

「……本当に？ 本当に意地悪されてないの？」

母が先ほどの笑いを引っ込め、そして若干の疑いが滲んでいるのが分かる声をだす。

言っている事を信じてもらえていないような気がしてむっとするヴァン。だが同時に、その声には心配するような色が混じっていることにも気付いていた。

（でも、心配かけさせるようなことしたっけ？）

そこがヴァンには疑問であつた。しかし、まずは先に言うべきことがある。

「何だよ、母さん。僕の言うこと信じてないの？」

「そういう訳じゃないけど、でも、ヴァンみたいな子がいたりすると……」

そこまで口でかかった言葉をマリアは飲み込んだ。誰か一人くらはい意地悪をしてくる子がいるんじゃないか、そう言いたかつたようだ。ヴァンくらいの年齢で大人並に魔導を修得しているとなると何かしらやつかみの類を受けているのではないかと心配になったのだろう。

しかしそれはある意味では当然のことといえる。魔導士を目指している子達を通っている中、を達成する助けになるからという目的で通っているヴァンは彼等にとって異質なものだ。彼等にはヴァンは、自分達にとって特異なもの、異質なものと見られてもおかしくないのだ。

その事を言おうとしたが、マリアはヴァンはまだ幼いと思ってその言葉を飲み込んだのである。

しかしヴァンはなぜ母が話している途中で口ごもつたのかも分らず、自分がどんな事をしているのかの自覚すら無いままにあっさりと答えた。

「？ ……何を言いたいのか分からないけど、ともかくそういう人は今はいないよ」

「……そう、それなら……今は？」

安心しかけた母だったが、ヴァンが話している中であつた一つの単語が気になり聞き返す。それに対して、ヴァンは頷いた。

「うん、ちよつと前まではいたんだ。でも別に気にすることでもなかったし、それに少しとつちめようと思つて捕まえて、それで話してみたら結構いい人たちだったから、今は仲良くやつてるよ。魔導の術式について教えあつたりもしてるし、だから心配しないで。…

…あ、でも、ちよつと、なんていうんだろう……」

ヴァンは話している途中から、急に齒切れが悪くなった。言いたい事はあるのだが、どういえば言いのか分から無いらしい。

急に齒切れが悪くなったことに怪訝な顔をするマリアだったが、しかし口を挟む事はしなかった。

しばらく悩んでいたヴァンであつたが、ややあつて話を再開する。

「……こういえば良いのかはまだ分からないんだけど……ちよつかにかけてくる子はいるか」

「……それは、どんな子なんだ？」

気になったのか、ここでグランツが口を開いてヴァンに聞く。

「うん、それはね……」

ヴァンは、話し始めた。

幼年から青年へ ― その子との関係 ―

――最近その子と会ったのは、二日ほど前のことだった。

ヴァンはそのとき、学校の廊下を歩いていた。授業も終わり、そして自主的な修練も終えてこれから帰るところであったのだ。既に窓から差す光には赤も混じり始めており、思ったよりも長い時間修練に熱中してしまった事をヴァンに伝えた。

すると後ろから、

「ちよつと待ちなさい、ヴァン！」

と言う、甲高い声がかかってきた。

振り向くと、そこには短く髪を刈りそろえた赤毛の少女が腰に両の手を当てて立っていた。ここらでは余り見かけない上質な生地で作られた衣服と、形がよく可憐さを漂わせた小づくりの顔には、しかしいかにも勝気そうな多少つりあがった双眸があり、その中にある茶色の瞳はある光の輝きは彼女の気性の強さを表していた。

「あれ、レベツカじゃないか？ どうしたの？」

そう少女、レベツカ・ヴェルナーにヴァンは聞いた。こういった風に彼女から声をかけられるのはこのところ頻繁にあった。そしてその内容は殆ど、

「べ、別に大した用事じゃないわ。ただ、またあなたに魔導の修練に付き合ってもらいたいだけよ！」

ということであった。そしてどこか焦っている風な声も、いつも通りである。

しかしヴァンはその答えに感心した声を出す。

「へえ……今日もやるんだ、修練。本当に熱心だね」

「と、当然でしょう。私は誇り高きヴェルナー家の跡取りなんだから！」

これも繰り返された返事である。ちなみに彼女の家は、代々魔導士を輩出している家らしい。そして彼女は家の事を言葉の通り、と

ても誇りに思っているようだ。

「それに熱心ってあなたは言ってたけど、ヴァンにはそう言われたくないわ。今日だって授業が終わってもここに残って、先生に教えてもらってるじゃない」

「うーん、それは確かにそうかも知れなけど、でもそれならレベルはどうなのさ。レベルカだってここに残ってるって事は、自分で修練してたってことじゃないの？ それに今からもやるだなんて、レベルカのほうが僕よりもよっぽど熱心だと思うけど」

「！ そ、それは……と、ともかくそのことは今はいいわ。で、どうなのよ。付き合えるの、付き合えないの？ はつきりしなさい！ この前みたいに『今日は家の手伝いがあつたの忘れてた！』なんて言って途中で止めるのは許さないわよ！」

聞き返すと、ますます焦りながらヴァンを問い詰めてきた。

ヴァンにはなぜ彼女がこんなにも焦っているのかがまったく分からなかったが、提案自体は別に断る必要は無かったため彼女に頷いて見せた。

「分かってる。あの時は僕も父さんにこつてりと絞られたから、もうやるつもりは無いよ」

ヴァンは近くの窓に近寄って日の傾きを見る。そしてレベルカを振り返り、微笑みながら声をかけた。

「うん、これくらいなら十分だ。まだ時間は有りそうだし、やろう。それで場所は」

「……決まってるわ。いつもの場所よ」

微妙に顔を赤らめて、そっけなく言うのであった。

……そして二人場所を変え、学校の授業でも魔導の実践練習をする際に使われている、校舎の脇に位置ある空き地にやってきた。

二人はそこに並んで立ち、まずヴァンが手始めとして術を組み立て始めた。

周囲の空気が変わり、光り輝く文字が宙に躍りだす。そしてその組み合わせた文字がヴァンの望む自称を世界に現出させた。

大地に亀裂が走り、土が盛り上がる。そして次の瞬間、爆ぜた。土ぼこりが辺りを覆い、土独特のにおいがあたりを満たす。

ヴァンが魔導を使う様を見ていたレベツカは、土ぼこりを払いながら感心したように息をついた。

「……範囲も広いし、術の構成だって良くできてる。相変わらず凄いわね……」

「そう？　ありがとう。でも、これくらいできなきゃ父さん達の助けにならないから、そう大したものでもないよ」

謙遜している風でもなくいうヴァン。

「……あんたの年でこれだけの魔導を操っておいてよく言うわ……そういえばあなたの家は農民だったわね。いつもこうやって魔導を使って手助けしてるって聞いたけど」

「うん。父さんたちも年をとってきたし、それにここに通わせてもらってる分は補わないと申し訳が立たないからね。今まで以上に巧くなって、楽しませてあげたいんだ」

「……優しいのね。まあ分かっていただけ……」

「？　レベツカ、どうしたの？　小さな声で何か言っただけだ……」

「えー？　い、いいえ、何でもないわ！　今度は私の番だし、どんな魔導を使おうか考えていただけだから……」

「そ、そう？　ていうか何でいきなり怒ったみたいな声を」

「そんな事はどうでもいいでしょ！　わかつたら返事……」

「わ、分かつたってば！　相変わらず強引なんだから……」

レベツカの迫力に押し切られるように黙らされる。

（でも、何でいつもこんな調子で怒鳴られるんだろう……？）

それがどうしても分からないヴァンであった。ついでに顔を赤らめているわけも。

しかし首をかしげていぶかしんでいるヴァンに、レベツカは何を言ってるんだと言わんばかりに睨んだ。

「あなた程じゃないわ。見たわよ、あなたに絡んでた連中を一人で

叩きのめして改心させたところ。そっちこそ強引極まりないじゃない」

「？……ああ、ロアやウィッツのことか。でも叩きのめしたなんていうのはちよつと言い過ぎだと思っただけ……」

「何言ってるの。同じこと言うけど、私見てたんだからね、あんたがあいつ等と呼び出されて、言い合いになった後で取っ組み合いになったの。しかも五対一なんて状況で物怖じもせずにあいつ等に飛び込んでいって、術を使わせる暇もなくぼこぼこにしてたじゃない。まああんたも同じくらいやられてたけど……」

「……あー、そういえばそうだったっけ。あれは痛かったな……」
懐かしむようにうんうんと頷くヴァン。そしてしきりに頷いた後で「けど」と続けた。

「うぬぼれかもしれないけど、結局はあれでよかったと思う。ロアたちが僕に不満があるのは分かっていたから、吐き出してもらった方がすつきりするし」

「あれは吐き出したって言うんじゃないかって吐き出させたって言うんでしょが……」

疲れたように言うレベツカ。しかしそれに悪びれることなくヴァンが笑って

「でも、今は皆と仲が良いよ？ それに僕もちよつと考えなしだったのが分かったし、むしろ感謝してるかな」

と言うものだからますます疲れた顔になる。

そんなレベツカの脳裏には、そのときのこと浮かんていた。

正直に言えば、彼女自身もヴァンの事は初めは気に入らなかった。優秀な成績を残すくせして、学校に入ってからすぐに「僕は騎士になりたい。だから父さんたちにここに魔導を習うために通わせてもらってるんだ」と何の曇りも無い笑顔で言い切ったからだ。

その顔には無邪気なもので、決して悪意を含んでいるわけではないことは分かっていたのだが、魔導士を目指して集まっている人間

ばかりが集うこの学校でそんな事を言うのはさすがにまずかった。

案の定彼のが気に入らないと言う子ができてしまい、そしてその中にレベッカも入ることになる。そして彼に対して嫌がらせをし、学校から追い出そうとするようになっていった。

初めはそれで簡単にヴァンを学校から追い出せるものだと思っていた。しかし、そこで事態は思いも寄らない方向に進みだす。

ヴァンはまったく嫌がらせを苦にしている様子がなかったのだ。それどころか魔導士を目指す人間が多いせいか、この学校の中では珍しい快活さと、そして人のよさとも言うのだろうか？　ともかく人の事を気にかける気質のためにだんだんと彼は学校の人間に受け入れられていったのだ。

そして思い通りに行かないことに痺れを切らしたヴァンのことが気に入らない子供達を中心である六人、その中にはレベッカにロアとウィッツという子もいた、はついに直接ヴァンを蹴落とそうとした。

ある日の放課後、彼等はヴァンを校舎の裏手に呼び出す。そして呼び出しどおりにやってきたヴァンを、彼等は一斉に襲い掛かった。その際にレベッカは女子と言うこともあって外れていたが、少しはなれたところで五人とヴァンの争いを見ていた。

五人組の方がヴァンを罵り、それにヴァンが一一答えて同時に殴りあうという器用な真似を小一時間ほど続けていただろうか。その後で皆して倒れこむ。

全員顔にたくさん痣が浮かび、服は土で汚れて息も絶え絶えだ。

しかしそこでヴァンは何事もなかったかのように立ち上がり、

「気はすんだ？」

の一言。勿論彼以外の人間はレベッカも含めて「は？」といった呆けた顔になる。

しかしヴァンはそれに構わず、続けて「なら、これからは仲良くしたいんだけど」と言い放ったのだ。

この言葉には五人とレベッカはまたしても同じ様な面をさらすこ

とになってしまう。

もつとも、この反応は当然のことだろう。今まで散々ののしって、殴り合っていた相手がいきなりそんな事を言うのだから。

だがヴァンは彼等に聞いてなかったとも思っただのか、もう一度同じ事をいい、にっこりと笑って見せたのだ。

余りのことについていけず、わけが分からないままに「なぜそんな事を言うんだ」とか「それならどういふつもりで自分達についてきたんだ」と問い詰める五人。しかし返ってきた答えは、

「そんなの、僕が君たちと仲良くしたいからに決まってる」

というもの。そして続けて、

「ずっとこんな風にいがみ合ってるんじゃないままに、どうせだったら不満とかも全部言い合っちゃったほうが良いかなって思ってたのだ。」

三回目の呆けた面をさらす五人とレベッカ。すっかり毒気を抜かされて、もう何を言っても良いのか、そもそも何をしたらいいのかわからなくなっている様子が遠くから見ているレベッカにもありありと分かった。

結局その後は自然に喧嘩はお開きとなり、後にその喧嘩の事を聞いた学校の教師によってその場にいる全員が先生に説教を食らったのだが、しかしこの一件がレベッカたちに彼、ヴァンに対する見方を変える大きな事件だったことは間違いが無かったのである。

幼年から青年へ ― 始まり ―

一通り思い出した後で、レベツカはじつとヴァンを見る。その顔にはありありとした呆れと、同時に感嘆が浮かんでいる。しかし、その口から出てくるのは

「……あんたって時々とんでもない馬鹿かって思うときがあるわ」

こんな言葉。しかし馬鹿にされてるような事を言われてもヴァンは笑みを崩さず、

「そう？」

とだけ返すのだ。

「そう？　じゃないわよまったく!!」

まったく表情を変えないヴァンに声を荒げたようにいつて、しかしそれでも穏やかに笑っているヴァンに、レベツカの表情が急にしおらしいものになる。

現在に至るまでに、レベツカたちとヴァンの関係は改善されていた。結局のところ、彼等がヴァンに嫌がらせをしようとしたのは魔導士を目指すものとしてのプライドの問題であり、その事を素直に伝えたと、ヴァンは驚いた顔になってすぐに謝った。

たったそれだけのことのためになぜ、あんな事をしてしまったのかとレベツカの心には後悔が浮かんでいたのだ。

「？　どうしたの？」

突然変わったレベツカの表情に気付き、ヴァンが心配そうに問いかける。レベツカは、しかしヴァンの問いかけには答えずにまったく別の事を彼に聞いた。

「……ねえ、ヴァン。あんたは何で魔導士を目指さないの？」

「え？」

いきなりの質問にヴァンは間抜けな声をあげる。しかしそれに構わず、レベツカは畳み掛けるように声を重ねる。

「え？　じゃないわ。質問に答えなさい」

「……えーと……言わなきゃだめなこと、それ？」

「そうよ。……聞いたわよ、また先生に褒められたんですって？」

さっきの魔導だって私が認めるくらいのものだたし、そんなに魔導ができるのに、何で魔導士を目指さないのよ。あんたなら絶対にまあ私ほどじゃないだろうけど、いい魔導士になれるはずよ」

「……」

「前にあんたが言ってたわよね。この学校に来てるのは騎士になったときに魔導を使えこなせていた方がいいからだって。そこまでして騎士になろうとしてるのは何で？ どうせあんたのことだろうから人の役に立ちたいだとかって理由とは思うけど、別に魔導士になつたってそれはできるじゃない」

「……それはまあ、そうなんだけどね……ま、いいか。どうせ隠すことでもないし」

そう言つて、ヴァンは自分がなぜ騎士を目指すのかを説明し始めた。そしてそれが終わった後には、彼の前にいるレベル力は深いため息をついており、

「あんたって馬鹿じゃないの？」

ため息の後に出たのは、そんな言葉だった。

「ゼノン様みたいになりたいだなんて、幾らなんでもそれは望みが大きすぎるわよ。あんたゼノン様が何をしたか知ってるでしょう？」

「もちろん。でも目標は大きいほうがいいでしょ？ それに、確かにあそこまで大きな事や、大勢の人を守れないかもしれないよ。僕だってゼノン様がどれだけの事をしてきたか知ってるんだし。でも、それであきらめてちゃ何も始まらないとも思うんだ」

話す少年の瞳に輝きが宿る。それは少年がその夢を持っていたときから輝き続けている純粹で、ひたむきな憧れの光だった。

彼は力強く自分の夢を語り続ける。

「もしかしたら僕には皆を守る力はないかもしれない。でもそれをする誰かを助ける事是可以。だから騎士になって、自分でそれをするか、できる人を助ける力になりたいんだ」

「……」

「魔導士も悪くは無いのかもしれないし、みんなの事を助けるってことではそっちの方が良いと思うけど、でもこの思いだけは、大好きな皆を、そして大勢の人たちを守りたいって気持ちだけは譲れないんだ。だから、ごめんね」

語り終えたヴァンは頭を下げる。しばらくその様を見ていたレベツカは、ふうとため息をついて「なにやもう……そんな風に言われたら、もう何も言えないじゃない……」と呟いた。

「分かったわよ。でも私の誘いを断ってそこまで言うんだから、絶対にやり遂げなさいよ。もし途中であきらめなんかしたら許さないわよ！ 分かった！？」

「？ まあ諦めるつもりなんかまったく無いけど……」

「分かったか分かってないかで聞いているの！ どっち！？」

「わ、分かったよ！ 諦めない、絶対に騎士になつて見せるよ！！」

「ならいいわ。……私も負けてられないわね。見てなさい、私もあんたに負けなくらい立派な魔導士になって見せるんだから。お互い、必ずやりとげましょ！ いい！？」

「う、うん……」

レベツカの勢いに負けて頷かされるヴァン。それにレベツカは満面の笑みで返し、

「よし！ じゃあ修練再開よ！ 今度は私の魔導の腕を見せてやるんだから！」

と張り切つて術式をくみ上げていく。

そうやって、人気がなくなった学び舎的一幕は過ぎていったのだ。

「つてことがあったんだ。うーん、でもこう話してみるとちよつかいをかけてくるっていうのとも違って、突っかかってくるって言うのかな？」

そうヴァンが話し終わると、ふう、と話を聞いていた母がため息

をついた。そこに若干の呆れがは混じっているのは、彼の話を聞けば仕方が無いことだろう。

「ほんと、何で僕に突っかかってくるんだろう……あれ？ 何で二人とも笑ってるの？」

そしてヴァンは、母がため息をつくと同時に隣にいる父と一緒に笑みを浮かべていることに気付くのだった。

「いや、何と言うか……な……お前がしたことに驚いているというのもあるんだが……」

「凄く微笑ましい話だと思ったのよ。それにしてもあのときの痣はそういうことだったのね……ぼろぼろなのになぜか凄く明るく笑うからどうしていいのか分からなかったけど。でもその様子なら安心していいみたいね」

「??? 何で安心できるの？ というかレベッカが何で突っかかってくるのか父さんたちは分かったの？」

ヴァンはなぜ笑い出したのか分からず首を傾げるのだった。ちなみにその事を二人に聞いたとしても、

「ヴァン、このことについては聞いてはいけない。私達はわかっていても、本人が知られたくないって思ってるかもしれないからな」
「そうよ。それにあなたはまだ、そういった人の心の機微に疎いところがあるみたいだから気をつけなさい」

といわれ、誤魔化された。なぜ笑ったのか分からないままで何となくのけ者にされたような気分になるヴァンであったが、二人の笑みは悪いものではなく、二人の言葉通り、微笑ましいものでも見ているかのような笑みであったため、二人の言うとおりにしたほうがいいかと思ひ直すのだった。

「……なら気にしないことにするけどさ……でもほんとに分からなかったら教えてよ？ どうしてレベッカがあんなことしてくるのかわりたいし。それが悪いことだったら尚更だよ」

「ふふ、まあそう気にしすぎるな。むしろ発破をかけてくれる頼もしい味方ができたじゃないか。喜んでもそう気味悪がることは無い

はずだぞ。そういう事をしてくれる人間は大切にすることだ。……さて、そろそろ十分体も休まっただろう。また始めるとするか」

木剣を手に木陰から立ち上がり、グランツは日差しの中に歩いていく。それにヴァンも「うん」と言いながら木剣を手に立ち上がって後を追った。「無理はしないでね」というマリアの言葉が後ろからかかり、それに手を振って返す。

そして二人は、先ほどの稽古の時のように相対する。

「今度は絶対に一本とって見せるから、見ててよ父さん！」

「その意気だ。どんな敵に対しても闘志が衰えないのは戦士として、騎士として最低限の条件だ。いかなる状況であつても活路を開く光明はあるものだからな」

二人して楽しげに笑いながら言い、そしてこれからの戦いに向けて気合を高めていく。

と、その途中で「……ふむ」と何かを考え付いたのか、グランツがそう漏らした。ヴァンはそんな父の行動に首を傾げる。

「？ どうしたの父さん？ 変な声だして」

「いや、なに。ただ私に初めて勝つても、何も無いんじゃないっつらんと思ってたな……それに、お前の剣の腕は確実に上がってきてると私は思っている……そうだな、今度機会があつたら、自警団の連中にも話を通しておこう。もしかしたら相手になつてくれる人間がいるかも知れん」

「え、本当！？」

突然の提案に驚きと喜びの声をヴァンはあげた。

「ああ、本当だ。私だけを相手にしていても単調になるだけだし、そろそろ私以外の相手とも戦うときだろう。様々な人間の動きを見て、より一層自分の技を磨くといい。……ついだ。今日はこれが終わったら体術の方も教えてやる」

「体術かあ……うん、分かった。じゃ、行くよー！」

「おうー！」

父の提案により一層気合を漲らせ、ヴァンは飛び掛っていく。夏

の日差しの下で、再度木剣を打ち合う音が響き始めるのだった。

そして再び歳月は流れる。

何度かの春と冬が過ぎ、全てのものに過ぎ去っただけの時が積み重なっていく。

人が切り拓いた道は勿論森や林といった自然の中にも、そこに生きるものたちの通った跡が少しずつ刻まれていく。そしてそれは家という人が住まう場所には当然のごとく当てはまった。

人がその中で暮らす日々の中で刻んでいく過去の足跡。家に子供がいればその成長と共に物を置く高さが変わっていったり、扱っている物自体が大きく変わっていったりした。

——それは成長の軌跡。

特に成長期の変化は大きく、一年でかなり大きさが変わったときもあった。

そうして積み重ねてきた成長。それを以って今、少年は新たな一歩を踏み出そうとしていた。

「じゃあ行ってくるよ」

「ああ。体に気をつけてな」

「辛くなったらいつでも帰ってきていいからね。それで絶対に帰ってきて」

家の前でそんな言葉を交し合う、髪に白が目立ち始めてきている年かさの夫婦と、すらりとした長身に均整の取れた筋肉の鎧を身に付けている少年という三人の姿がある。夫婦の内、妻は目尻に涙をためていた。そんな彼女に、少年は心配そうに声をかける。

「ちょっと、ここまできて泣かないでよ母さん」

「そうだぞ。心配なのは私も分かるが、そう泣かれるとヴァンが困るだろう」

「仕方ないじゃない。いつまでたっても、幾ら大きくなっても心配なものな心配なんだもの」

そう言う少年、ヴァンの母はためていた涙をぼろぼろと落とし始めてしまう。

片方の手で妻の肩を抱き、もう片方の手で背中をなでて落ち着かせてやる父は、妻が少し落ち着いたところで彼女に向けていた視線をヴァンに向けた。ヴァンの体は勿論、顔にもその成長の軌跡が刻まれており、艶やかな黒髪はそのままだったが顔立ちは凛々しさが混じるようになり、頼もしげな雰囲気を作り出していた。

その姿を見る父の視線には、ヴァンの成長に満足する父親としての誇りがある。

「……今の今まで本当に良くやった。もう私がお前に教えてやれる事は何も無い……私はお前がここまで成長してくれた事を、誇りに思う」

「やめてよ、父さんまで。何も全部僕がやったわけじゃない。父さんたちがいてこそこの僕だよ。最後にこんなことまでしてくれてさ……」

言って自分の体に目を落とす。ヴァンは胴着の上に外衣を着込み、胸鎧とそれに合わせた小手、足具を身に付けていた。更に外套を鎧の肩に付けられた留め具に挟んで後ろに流している。そして長剣と短剣が腰の革帯に差しこまれ、小さなポーチが数個取り付けられていた。肩には皮袋をかけており、立派な旅装束である。

茶目つ気たつぷりにグランツが笑っている。

「ふふふ……可愛い我が子の門出なんだ。それぐらいしたところで誰も文句など言うまいよ。いや、いたら殴りこみにでも行ってやろう。折角の門出を邪魔するとな」

「なにそれ……父さん、変なこと言わないでよ」

呆れたように言うヴァン。しかし口に浮かんでいる苦笑は隠しきれない。しかも

「それは私も許せないわね。夫婦で行きましょうか」

「母さんまで乗ってこないでよ！ まったくもう……」

なっていたマリアまで乗ってきたものだから困ったものである。

結局その後三人で噴出してしまい、少しの間だけ笑いあっていた。

そして笑いを治めた後、しばし見詰め合って

「……じゃ、今度こそ行くよ」

とヴァンは再び言い、二人に背を向けた。そしてそのまま歩き出

し——走り出す。

「頑張るんだぞー!!」

「体には絶対には気を付けてねー!!」

後ろから父と母の激励の声が聞こえる。今まで育ててもらい、支えてもらった二人と別れるのは寂しい。しかし、寂しさを感じているヴァンの心にはそれ以上に彼を突き動かすものがあつた。

それは夢。彼の、幼い頃からの夢。それが叶うときがやってきたのだ。

（見ていて、父さん、母さん、そして皆）

心の中で二人に呼びかける。

（僕は必ず騎士になる。皆を守る力を身に付けて見せる!）

そして、改めて心に誓う。

彼はひた走る。その先にあるのは天帝の座す場所——エルザ

リア、そこを目指して。

ヴァン、時に十七歳。彼の、彼等の物語が今、始まる。

旅路 ― その道中 ―

「ほう、兄ちゃんはセルベ村から来たのかい。エルザリアに登って騎士になるためとはいっても随分遠いところから来たもんだなあ」
「そうでもないよ。ここまでくるのに一週間かかったけどそんなふうには感じなかったし」

「……というかそりゃあ、感じてる暇がなかったただけじゃないのかい。普通一週間かかってここまでできたら多少は遠いって思うだろう」

「……えーつと……言われてみればそうかも」

本当に遠いと感じていなかったのか、店主の指摘で初めてそのことに気付いた黒髪の少年、ヴァンは人の少ない店内へ目を泳がせた。ここはエルザリアへ続く道の途中にある宿場町、その旅籠のひとつである。

ヴァンが故郷、セルベ村を出てから、彼の言うように一週間の時間が過ぎていた。

旅はここまで順調に進み、ヴァンの足ならばエルザリアまであと三日程度といった距離まで近づいている。

現在、ヴァンは昼過ぎに今いる宿場町に着き、遅い昼食をとっていたところであった。

ちなみに昼食は先程食べ終わったところで、ヴァンが座っているテーブルの上にある皿はすべて空になっている。今はちょうど昼の忙しい時間が過ぎたこともあって、暇になった店主と談笑しているというわけだ。

ヴァンは、しかし、目を泳がせた後、幼いころからあった快活さはそのままに力強い精悍さも感じさせるようになった顔を緩ませて人懐っこい笑みを浮かべる。

「でも楽しかったよ。今までほとんど村から出たこともなかったから、初めて見るものがいっぱいあるのが楽しくて楽しくて。遠いっ

て感じなかったのはそのせいもあるのかもしれないなあ」

そして嬉しそうに語るのだった。

実際ほとんど村の外に出なかったヴァンにとって、旅をしながら目にするもの全てが驚きだった。

小さいころから触れてきたから分かるのだが、街道が走っている森に入ると故郷で走り回っていた森では感じたことのない感触、木々の種類は同じでもその持っている中身はまったく違うこと、を得たり、更に家の形の違いや人の暮らし方の違いを感じるたびに新しい知識を得られた感動に浸るのだった。

それらの事を思い出すと自然、嬉しさが湧いてくるのである。こんなにも村の外には多くのことを見聞きし、そして感じられることがあるのだと。勿論、騎士になることは忘れていないが、しかしこういった今まで眼にしたことがないものを見る喜びヴァンにとっては押さえられるものではなかったのだ。

彼の笑顔につられてか、店主の顔にも笑みが上る。

「そうか。確かに今まで村の外に出てねえつんならそう感じたっておかしかねえか……おっと、もう食い切っちゃったのかい。どうだい、水なんかいるか？」

「あ、お願い」

「おう」

ヴァンが食べ終わっていることに気付いた店主が気を利かせて言う。ヴァンは感謝してそれを受け入れるのだった。

店主の持ってきた水をヴァンは飲んでみると、ふと彼は気になったことを聞いた。

「そつえば、そんなこと言ってるおじさんこそこの村以外のどこかにいった事はあるの？」

店主はヴァンの問いかけに頷いた。

「食材仕入れる目的でな。まあ店を長く空けるわけにはいかねえから近くにしかいけねえが、それでも色んな村や町の市場を行ったりきたりしてるぜ」

「へえ……あれ？ でもこういう宿場町だったら色んなものが集まるんだし、わざわざ他の町に出かける必要もないんじゃない？」

ヴァンはこの宿屋に入る前に見た町の光景を思い出す。通りはかなり賑わっていたし、露天を開いている行商人もかなり居た。まだ足を伸ばしていないが、これだけの盛況を見せているのだから市場もまた活気にあふれているであろう事は容易に想像がつく。

ヴァンの質問に店主は「それは、まあな」と肯定する。

「確かにこの市場だけでもかなりの食材は手に入る。だがな、それで俺は満足できなかったのよ」

「え？」

「折角世の中が平和なんだ。だから食材もここに集まってくるやつだけじゃなくて、色々なとこだわってみようってことにしてな。少しでもいいのがねえか探してるのさ。ま、一種のこだわりって奴だ」

「……はあー、なるほどね」

ヴァンは店主のこだわりと料理にかける意気込みに感心し、感嘆の吐息を漏らした。

（そつえば、さつき食べた料理も美味しかったつけ。それだけ真剣にこの仕事をしてるんだな……）

こついうところは見習いたいなとヴァンは思う。

そんな事を考えてるとは知らず、店主は

「ま、これも何もかもこの平和があつてのことだ。まったく天帝様には感謝してもしたりねえぜ。おっと、それはこの地域を治めてる白王様もだがな。そついうわけで、あの方達を助けるために騎士を目指してくれるのは大歓迎だ！ 俺も応援してるぜ！」

と気さくな様子で言い、ヴァンの肩を叩くのだった。ヴァンはそれに笑顔で「うん、ありがと」とお礼を言った。

「……あれ？ そつえばいろんなところに行つたって言ってたけど、それならどこに言つた事があるの？」

そこでふとそのことが気になり、店主に行き先を聞いてみるヴァ

ン。

「そうだな……とりあえず地図に載ってる近場ならもう完全に行きつくしたぜ。まあその名物だとか品が良けりやあ何度も通うことになるから、後後になつてくると限られるようになってきたがな。それで当然のことだが、こんだけ近けりやあ……」

「！エルザリアにも！？」

店主の言いたいことに気付いたヴァンは驚き、身をテーブルの上に取り出した。店主はそれを見て得意げに話し始めた。

「おうよ！ あそこは色々なものが集まってくるから新しい食材を買うにも都合がいいんだが、やっぱり凄かったぞ。さすが天帝様のいるところなだけはあるって感じだったぜ！」

「どんな、どんなところだったのさ！？」

目指しているところの、そして幼いころからの憧れの人がいる場所の話となつて黙つていられるわけもなく、早く話せとばかりに促す。

「そうだな、一言で表すとんでもなくてけえのよ。都市の大きさは勿論だが、建物もでかい。後人もんでもなく多いんだ。ともかくすげえぞ、一目見たら腰を抜かすこと間違いなしだ！」

「そんなに！……うーん……」

そこでどうしたのか、突然さっきまでの勢いを失つてヴァンは頭を抱えた。店主はそんなヴァンを怪訝に思い、「どうしたんだ？」と聞く。すると返ってきたのは

「えーっと……笑わない？」

という返答だった。しかもなぜか情けない表情になっている。ますます店主は困惑した顔になった。

「おいおい、どうしたんだいきなり？ なに言つてんだ？」

「その……おじさんの話からエルザリアが凄く大きくて人も多いつていうのは分かったんだ。でも、なんていうか……それってどれくらいなの？ 僕の住んでた村の何倍くらい？」

「は？」

ヴァンの言った言葉の意味が分からず、ただその一言だけが口をついて出る。それを見た彼は

「だ、だから！　今まで村から出てなかったから、建物が大きいっていうのも人が多いっていうのもどれくらいなのか思い浮かばないんだってば！　それでこういう聞き方をしたんだって！」

恥ずかしいからか、ヴァンは顔を赤くしながら一気に言い切る。続いて悪あがきのように「い、一応遠くからなら建物は見たことあるし何となく大きいのは分かってただけど、でも近くで見たことがあるわけじゃないし……」とぼそぼそと小声で言った。

ヴァンの言い訳に店主はしばらくの間呆然としていた。しかしその後で爆笑する。

「はははははははははは！！　そ、そうか。そういや村から出てないって言ってたっけか。しかし幾らなんでも比較が悪すぎる！　村で比較したんだったら何倍になるかわかりやしねえぐらいでかいんだからな！　あーしかし笑えるぜほんと！」

「や、やっぱりそう？　……というか笑わないでって言ったのに……」

しよげるヴァン。店主は「まあまあ」と彼の肩をまた叩いた。

「それは悪かったな。だがそんな比較を持ち出してくるお前さんだつて悪いぜ？　悪くいや常識知らずもいいところって事になるかな。むしろ今のうちに直すことができてよかったんじゃないやねえか？」

「……それって物は言いようって気がする……結局笑われるのには変わりがないし……」

じろりとヴァンは店主を睨む。しかしすぐに止めて、代わりに笑みを浮かべた。

「……でもおじさんの話を聞いてたら、なんだかますますエルザリアに行くのが楽しみになってきたよ。そっか、そんなに凄いな……！」

興奮を抑えきれないかのようにそわそわと椅子の上で動き始めるヴァン。いきなり様子が変わったことに店主は付いていけなかった

ようで「お、おい、どうした？」と心配げな声をかけるもヴァンは聞いておらず、そしてついに「よし決めた！」と勢い良く立ち上がったのだった。

「話聞いたらじつとしてらんなくなってきたし、今から出るよ。昼食ありがと！ 今度着たときは泊まらせてもらうから！」

居ても立つてもいられない様子で言いながらテーブルの上に硬貨を置き、凄い勢いで出口に駆け出したのだった。

その勢いの良さに呆然としてそのまま見送ってしまった店主は、はつとして「ちょ、ちょっと待った！」と叫んでヴァン呼び止めようと追いかける。しかし店の外まで出たときには、ヴァンの姿は既に豆粒ほどの大きさで街道を走っていったところだった。

思わず「は、早ええ……」と呟く。

「たったこれだけの時間であそこまで行けるってのかよ……そういや小さいころから騎士になるために親父さんと稽古してたって言ってたつけ。しかしだからって言ったってここまで早くなるもんかあ……？」

ヴァンの速さに感心しつつもどこか納得できないものを感じ、そう漏らす店主。まあヴァンがあそこまで早くなった理由、幼いころから故郷の村を、その周りにある山々を走り回っていたことなど知らないのだから当然の反応ではあるが。

ふと彼は空を見上げる。ヴァンが店に入ってきたときは眩しさを保っていた太陽だったが、今は茜色が混じり始めていた。どうやら話している間に随分時間が過ぎてしまったらしく、そのことに驚いた顔をしていた。

ヴァンと話していたのは彼としても楽しい時間だったが、こうまで時間が過ぎるのを早く感じるとは思わなかったようだ。そしてその事を確認した店主は、ヴァンが駆け去っていった方を心配げに見遣る。

その視線の先には、この宿場町ができた最大の理由、ファレナ山脈が聳え立っていた。連なっているそれぞれの山は起伏が激しく、

夜間の登山が危険である事は一目で分かるほどである。北からエルザリアに向かうまでの最大の難所といえるだろう。

「もう夕方だぞ……途中にある砦まで、完全に日が落ちるまでに辿り着けんのか……？」

それに、と付け加えるように呟く。ヴァンに言い忘れたことが、一つあったのだ。それは、

「小せえ規模だが、山賊も住み着いてんだぞ……」

旅路 ― 闇夜の中で ―

ヴァンと旅籠の店主が話してから数時間後。夜の闇がファレナ山の斜面を覆っていた。

その上にあるうつそうとした森の中にぽつんと、明かりが灯っている。

それは木々の中にある小さな焚き火であった。その隣には艶やかな黒髪を持つ少年、ヴァンが傍らに荷物を置き、マントに包まりながら座っていた。

ふと、ヴァンがはあ、とため息をつく。その顔には気落ちした様子がはつきりと浮かんでおり、がっくりと肩を落としていた。

（マズった……エルザリアをすぐ見たいって思ってたはしゃぎすぎたみたいだ）

そしてまたため息をつく。

（情けないなあ……）

ヴァンは思う。店主の話を聞いて早く辿り着きたい、幼いころからの憧れを一刻も早くこの目に納めたい。そんな思いに突き動かされて、強行軍をしてしまったのが運のつきだったようだ。

意気揚々と宿場町を出発し、日が落ちかかっていることに気付いていたが山道の途中にある砦に辿り着けるだろうと思って駆けたのであるが、幾ら体力に自信があるといってもずっと駆け続けることなどできるはずがなく途中でペースが落ちてしまい、完全に日が暮れてしまったこのさまである。

目的地が近くなってきた気分が浮ついていたこともあるとはいえ、一応日没までに砦に辿り着けるだろうとは計算していたのだが……日が暮れる前に確認した限りで現在の場所を推測すると、ここは山の中にある砦までの道の半分といった場所だ。

どう考えても砦までの距離を把握しきれなかったヴァンのミスである。急ぎの旅であるわけでも無し、余裕を持ってこの山に入

るべきだったのだ。

(……子供のころから山道を走り回ってきたし、魔導で周囲を探ることもできるから、とりあえず今のところ心配はないんだけど……それにしたってこれはないよ……)

三度目のため息をつくヴァン。

よほど自分の判断が甘かったことがこらえているようだ。普段の快活さが影を潜めている。しかし、それはある意味では当然といえた。

(父さんに知られたら殴られるどころじゃすまないよ……)

自分の戦い方、そして戦士としての振る舞いや心構えを教えてくれた師の事を思い出して体を震わせるヴァン。

剣の扱いは勿論のことだが、彼の剣士だったころの経験を生かして戦うものとしての心構えなども父から教えてもらっていた。その中で冷静になることも幼いころから教え込まれていたはずなのだが

……

(浮かれていたなんてこと言っただって納得してくれるわけがないし

……うわあ……)

折檻される様子が浮かんでしまったヴァンは更に体をぶるぶると震わせた。

こんな年にもなってまだ父が怖いのかといわれればそれまでかもしれないが、しかし怖いものは怖いのだ。

(あーダメだダメだ！ 考えれば考えるほど憂鬱になってくるし。ともかくこのこと考えるのはもうやめ！！)

首をぶんぶんと振って悪い想像を追い払う。そして他の事を考えるようにしたヴァンであった。

強引に気を取り直した彼は、ごそとマントの中に手を突っ込み、地図を出す。そこにはヴァンの村からエルザリアまでの距離やその途中にある村などが書かれていた。そして当然のことながら、ファレナ山脈の中にある砦のことも地図には載っている。

日が暮れる前に最後に見た、街道に散在するヴァンの腰までの大

きさをした小さな石柱が思い出す。

『軌石』と呼ばれているそれは街道に決められた距離ごとにおいてあり、自分がどれ程進めばいいのかを計ったり、もしくは自分が現在どこにいるかを確認するために使われている、目印のようなものだ。

ヴァンは最後に見た軌石が宿場町から出て何個目だったのかを考え、自分の推測と摺り合わせて考えてみる。結果は初めの予想通り、山の中腹部分だった。

とりあえず自分が山のどこら辺に居るのかを確認できて安心する。(……ま、といってもよっぽどのことはない限りこの街道に沿っていけばいいだけだし、この道を逸れさえしなければ辿り着けないなんてことはないんだけどね)

地図を見て改めて道を確認し、目を近くに通っている街道にやっと思っ。

この街道は北の人間がエルザリアに向かうために頻繁に利用する道でもある。そのため道の整備もきちんとされており、途中で途切れたりなどということもないだろう。

(エルザリアに行けなかったら始まりもしないんだし……それにエルザリアに着いても、騎士になるためにはまず従騎士になるための試験に受からないといけないんだ)

騎士になるために越えなければいけない壁を想像し、ヴァンは身を引き締める。

(こんな失敗を何度もするわけにはいかないんだし、昔からどうも変に突っ走る癖みたいのがあるから、気をつけよ。……さて、考えるのはこれぐらいにしてそろそろ寝よっか)

目を閉じてヴァンは意識を集中させる。すると宙に現れる輝く文字列。彼はそれを操って一つの形にまとめ、発動。すると空中に多量の水が現れる。

ヴァンが使ったのは水を操る魔導だった。

子供のころは農作業を手伝うことを優先してきたため大地を操る

魔導を優先して憶えてきたが、学院に通っていた成果がでて今では幅広い範囲の魔導を扱えるようになっていた。

水が焚き火に降りかかり、火を消していく。その様を満足気に見つめるヴァン。今の魔導は中々早くくみ上げることができたからだ。過信しているつもりはないが、しかし少しは自信を持つていいだけの魔導を身に付けたはず。ヴァンはそう思いながら体を横にして目を閉じた。

（引き出しが多ければそれだけ用途が広がるってことだもんね……さて、明日は早く起きて少なくともこの山ぐらいは抜けられるようにしないと）

目を閉じてすぐに襲ってきた眠気に意識を混濁させながらこれらの事を考えていたヴァンは、ふと

（でも……変だな……）

そんなことを思った。

実はファレナ山脈に入ったときから、ヴァンは感じていることがあった。幼いころから自然に触れ合い、世界を感じてきたからかもしれないが、ヴァンは身の回りにある世界のことをより深く感じ取れる性質を持っていた。

そしてそんな彼の感覚に、この山は訴えかけている感触があるのである。曖昧ではつきりとせず、見過ごしても仕方がないほどの小さな、しかし確実にあるもの。即ち

（この山……はつきりとは分らないけど、どこか違和感が……）

そう考えるのを最後に、ヴァンは完全に眠りに落ちた。

より深い闇が世界の全てを包む。ヴァンが起きていた先程まではまだ世界には動くものたちの気配があった。しかし今はそれすらも感じさせない、静寂が全てに覆いかぶさっていた。

そしてヴァンもまた、その中に居る。

彼はそれに身を委ね、安らかな眠りについていた。穏やかに胸が上下し、無防備な寝顔ですーすーと息をついている姿はなんとも微

笑ましい。もつとも時折「うーん……ああ、ごめん父さん。反省してるから……」と顔をしかめて寝言を言っているあたりは、情けなさも誘うのであるが。

しかし、安らかな眠りも長くは続かなかった。

「――！」

突然ヴァンは目を覚ましたのである。なぜなら、

（人の気配……！？　それも複数……この感じからすると十人くらいか？）

そう。この深夜に動く人の気配を感じたからだ。ヴァンは警戒する。（何なんだ？　こんな時間に山の中で動くんなんて普通じゃ考えられないぞ……）

夜の山道が危険である事、特にこのファレナ山脈のような起伏が激しい山ならば尚更に転落といった事故が道が見えない夜に起こりやすいであろう事は想像に難くないはず。それらの不利を押して動いているのは不審としか言いようがない。

身を起こし、気配を探ることに集中する。

気配の動きを見るに、どうやらヴァンの居る方に近づいてきているらしい。彼等は一体何者なのかとヴァンは思う。

しばらくどうするか迷っていたが、

（……この際だ、いつそこちらから近づいてみようか）

とヴァンは考える。

このままここに居て近づいてくるのを待ってもいいが、時間の無駄になるだけのような気がするし、何より彼等の正体が気になるのだ。それにヴァンには元より、不審だから、危険があるからと見過ごす気などないのだから。迷っていたのはあくまでここで待つか近づくかである。

決断したヴァンは立ち上がり、傍らにいていた荷物の中から剣を取り出して剣帯にさす。そして音を立てずに夜の闇を走りだした。森に生い茂る木に、そしてその周辺に油断なく注意を払って進んでいくヴァン。

その上で夜の闇と生い茂った木々、それに気配がある場所は街道から外れた所であったため舗装されていない山道は進むのに厄介だったが、ヴァン自身の山道を登る経験と、彼の感覚が手伝ってくれたためどうにか足を緩めずにできた。

今回に限っては幼いころからし続けていた自分のやんちゃに感謝したヴァンである。

やがてしばらく走っていると、前方に明かりが見えた。それも複数。

（あれか……）

気配を探るのが当たっていたことに安堵しつつ、明かりがある方向に向かって今まで以上に足音を立てないことに細心の注意を払う。だがかなり近づいたところで、あることに気付いた。彼等の内の何人かから、魔力が立ち上っている。そして魔力を立ち上らせて組み上げている式の形に気付いたヴァンは

（ッ！ まずい！）

慌てて自分も魔力を立ち上らせて魔導の式を展開した。彼の周りに文字が現れ、しかしそれらは形を成すことなく周囲に解けるように消えていってしまった。だがこれは魔導を使うのに失敗したわけではない。

今彼が展開したのは『隠式』と呼ばれる魔導の一種。これは魔導の持っている『読解』の力、世界を探る力を誤魔化するためにある魔導である。

平たく言えば隠式の魔導を展開させている場所は『読解』の魔導が探った際には反応せず、元々の空間が存在するだけと錯覚させるというものだ。

彼等の仲間が使っているのはまさしく『読解』の魔導であり、しかも世界に働きかける『操律』の下準備に使うそれではなく周囲の状況を読み取ることの特化させた術式だった。気付くのが遅ければヴァンも術式に引っかけたことだろう。

だが、これでヴァンはますます彼等に対する疑いを強めた。

(……これだけ広範囲に『読解』を使い続けてるって事は、相当辺りを警戒してるって事か？ 早合点かもしれないけど後ろぐらい、探られたくない何かがあるってことにも繋がるか……)

それに、とヴァンは思う。立ち上っている魔力や術式の複雑さを見るに、今使われている『読解』の魔導は相当の負荷を術者にかけているものである事は想像に難くない。しかもそれを連続して使い続けたとなると術者にかかる負荷もそれだけ大きくなる。足元に気をつけたいのであれば自分達の周りにだけ魔導を使えば済む話なのだし、つまりそれだけ無理をしても周囲を探らなければならない理由があるということだ。

ヴァンは目を細めて暗闇の先にある正体不明の一团を睨みつける。だがここからではまだ彼等の姿すら確認することはできない。

(ともかく、今はあの人たちが何者なのかを探らないと……ここからじゃまだ姿も見えないし)

隠式の魔導は自分の存在全てが誤魔化せるほど便利なものではなく、気配や物音は隠せない。

術式を展開しつつ、より慎重に歩を進めてヴァンは再度彼等に近づいていった。

旅路 ― 盗賊との戦い（上）―

ようやく姿が見えるだけの距離にまで来たヴァン。木の陰に隠れつつ、改めて確認しようとした、その時だった。彼等の居る方から、すすり泣く声が聞こえてくる。

慌てて木の陰から首を出し、松明の明かりが照らすその姿を見た。その集団を作っている人間の年齢は様々で、ヴァンと同じ十代の者も居れば三十路に届いていそうな皺が出始めた顔をしている者も居る。また身に付けている物々しい武具や防具の数々も種類が安定せず、曲刀や大剣、小剣に槍に、ただの服を纏っている者もいれば皮製の鎧を纏っている者もいて見る者に雑多な印象を与えるだろう。そしてその中でも大柄な男が肩に背負っている、袋。そこから声は聞こえてきていた。更に続けて彼等の話し声もヴァンの耳に入ってくる。

「……今回は一人だが上物が手にはいったな」

「ああ。しかも捕まえるのが楽も楽だったし言うことねえぜ」

「ちとあいつ等に渡すのが勿体ねえが、まあそりゃあ仕方ねえか。」

しかしその前だったら……へへへ」

「おいおい、涎でもたらしそうな顔すんなよ。みつともねえな」

「おっと、わりいわりい」

その内容は吐き気を催すほど醜悪なもので、これだけの会話だけでも彼等の正体をヴァンに気付かせるに十分だった。袋の中には言っているのは人間で、しかも女性。それを物のように扱い、自分の欲望をむき出しにしたような言動。

（こいつら……盗賊か！）

ヴァンは怒りをあらわにして腰の剣を抜きかけるも、相手の数と状況を思い出して何とか押し止めた。相手は十人以上。対してこちらは一人。まともに突っ込んで行つて良い数の差ではない。

ヴァンの中にある騎士になると決めた志が早く助けろとせかして

くるが、それを必死になだめる。

師である父の言葉が思い出された。「理想に溺れて無謀をするな」と。

あるとき父は自分に向かい、言ったのだ。

「お前の志はとても尊いものだ。そこまで人の事を思いやるなど、そう出来る者はいない。私はそんなお前が好きだ」

しかしそこで、「だが」と続けた。

「だからと言って理想を追い続けるあまり自分を粗末に扱っていいなどという道理はないことを憶えておけ」

父は言う。

「お前が人を思いやるように、人の中にもお前を思い遣る者がいる。それは私達であり、お前が知り合った人々でもあるだろう。自分を無碍に扱うのは、そういった人々を悲しませることになるのだ」

とうとうと語る父に、ヴァンはその時不満に思った事を覚えている。口を尖らせて反論した。

「話は分かったけど、でもそれなら無茶なくちゃならない時がきたらどうすればいいのさ？ 僕はできる限りの人を助けたい。そのために剣術や魔導を身に付けたりしてるのに、そういうときに役立てられないんじゃない意味が……」

ないよと続けようとしたときだった。父は「ならば考えろ」とヴァンの言葉を遮るように言ったのだ。

「お前が望む事を成せるように。そして自分が生きて戻れるように。難しいことだとは思う。その時々状況によってしなければならぬことも変わるだろうし、その中には本当に自分の命を賭けなければならぬ時もあるだろうしな。だが、ならばこそ考えなければならぬのだ。自分も、そして助けたい者も助かる方法を」

「……」

「助けるために無謀をし、その時はお前は人を助けられるかもしれない。だが死んでしまえばどうする？ その後は人を助けることなどできようはずもないのだからな。……聞こえようによっては命を惜

しんでいるようにも聞こえるだろうし、お前のことだから多分こう教えても無茶をするのだろうな。だが、全ての事を成すにはまず己の命がなければなせないのだという事は憶えておけよ」

最後にそう言って、その時の話は終わってしまった。

今も父の言ったこと全てに納得しているわけではない。しかし、ある程度は理解ができるようになったとヴァンは思う。

（少なくともすぐに突っ込まないで、状況くらいは見られるようにはなったからね……こんなときも突っ走るほど、馬鹿じゃないつもりだし）

深呼吸し、再度彼等の様子を確認する。そしてその中で、先程から『読解』の魔導を使っている人間の姿を見ることができた。

厄介なことに、それは身を崩した正規の魔導士だった。過去、魔導士たちにその資格を与え、そして束ねる組織『法の輪環』^{フープ・オブ・ロウ}に属していた事を証明する法衣や胸や手首には魔導を使用する際に補助の役割をする魔導器、神のシンボルを象ったアंकや宝珠がはめ込まれた腕輪があり、それが二人もいる。戦いになった際には彼等の魔導による後方支援も考えに入れなければならないのだ。ますますもって考えなしに突っ込んで行って良い相手ではない。

それにもしこの条件でヴァンが勝てる相手であったとしても

（捕まってる子を、人質にとられるかもしれない）

そうなっては手が出せなくなる。

ヴァンは隠れている木の近くを通り過ぎる盗賊たちを見ながら考える。今は我慢して盗賊たちをつけ、アジトを割り出した後で砦の人間と協力するか？ いや、それだと救出までに時間がかかるし、そもそも彼等のほうが地形を知っているだろうから見失えば取り返しが付かなくなる。しかも僕自身、そこまでこの『隠式』の魔導を保持していられる自信がない。叩くのは今。近くで動きを見た感じ、それほど個人の技量は高くなさそうだ。かといって十人近くを相手に戦って勝てるかは疑問が残るけど、でも……

彼等をつけることの不利を考え、そこから今この場で戦うことに

主眼を移すヴァン。

（幸いまだこつちには気付いていないみたいだし、戦うなら奇襲をかけるべき、か。それなら何とかなるかもしれない）

考えた中で浮かんだ最良の案はこれだった。『隠式』の魔導はまだ見破られていない。その利点を生かさない手は無いだろう。

（なら、攻撃をする初めの一手が重要になる）

狙うのは当然二人の魔導士と、肩に袋を担いでいる巨漢。魔導による支援を封じ、捕まっている人を助けることが出来る。後はその次の手でどれだけの人数を戦闘不能に追い込めるかといったところか。

しかし今の彼等の隊列、魔導士と袋をもった巨漢を隊の中心に配置して守っている、を見れば初めに彼等を倒すのは難しい。いかに迅速に倒すにはどうすべきか……

ヴァンは、音も立てずに剣を抜く。全身に力を込め、緊張で体の感覚を研ぎ澄ませる。

敵がどう動くかにも左右されるが、方針は決まった。初めに打つ手も既にヴァンの中では定まっている。それには問題もあるが、しかし今の現状ではこれ以上の手を望むべくもないこともヴァンは分かっていた。ならば、甘んじて受けるのみだ。

準備は整った。後は

「後は——やるだけだ!!」

ヴァンは、木の陰から飛び出した。

談笑していた盗賊たち。だが、突然その中の魔導士が目を見開く。

「おい、いきなり反応が……!」

そして警告を発しようとしたその矢先、「ぎゃあああああ!」と断末魔を上げて隊の後列を守っていた一人地面に倒れる。その背には肩から腰に斜めに走る赤い線が引かれていた。

何事かと思い、急いで武器を手にとって仲間達が声のした方を向く。

そこには彼等盗賊達の中心めがけてひた走るヴァンの姿があった。そして走りつつ、彼は剣を振るう。再度、絶叫が上がった。

今、ヴァンの中心に向かう進路上には道を塞いでいる者はいない。幼い頃から野原を、山を走って鍛えた瞬足を発揮し、まるで矢のごとき勢いで走る。だが、

「てめえ、ふざけるなあ!!」

怒りの叫びを上げて盗賊の一人が横から槍を突き出してくる。当たる直前、穂先を剣でそらすも初めの勢いがそがれてしまう。更に、

「よくも仲間をやりやがったな!」

「逃がすなよ。見たところ一人のようだし、なめた真似をした報いに鞭り殺しにしてやれ!」

襲撃に気付いた仲間がヴァンめがけて集まって来ていた。

今ヴァンが相手をしているのは槍を持っているのと大剣を持つている盗賊、そして通常の大さの剣を持った盗賊の計三人。前を大剣を持った盗賊が塞ぎ、左右から剣と槍を持った二人が襲ってくる。振り下ろされる大剣を剣でいなして軌道をそらし、攻撃の時間をずらして左右から迫る剣と槍の突きをヴァンは身をかがめてかわして全ての攻撃を避けて見せたヴァンは、身をかがめたまま前進してすれ違いざまに大剣を持った盗賊を薙ぎ払った。

これらは全て数瞬の出来事である。その間に見事な攻防をのけたヴァンは、しかしその顔は厳しいままだ。

先程の攻防も倒した盗賊は結局は一人だ。大勢に大した影響は出ていない。それどころかそのためにかかった時間のせいで前を塞ぐ盗賊の数が増えてしまっている。しかも彼等の先にいる目標の魔導士から『読解』とは違う魔導の術式を組み上げているのをヴァンは感じていた。

前と左右を塞がれ、しかも彼等の後方からは魔導を使って支援しようとする魔導士たち。八方塞がり、まさしくそんな言葉が浮かぶような状況にあってヴァンは、

「——これでいいんだ」

そんな言葉とともに、初めて笑みを浮かべていた。そして、その直後！

「！？　な……何だこりゃあ！？」

「さっきまでなかったぞ！！　いつの間にこんな……」

「お、おい、それどころじゃねえ！　ここにいたら……」

「逃げろ！　逃げろお！！」

驚愕の表情を貼り付けて、盗賊たちは口々に叫ぶ。その声中には多分に恐怖も含まれていた。

だが、それもそのはずだ。前を塞ぐ盗賊達のいる場所に重なるように、魔導の術式が現れたのだから。そしてその術式を制御しているのは、当然ヴァン。

自らの作戦が成功したことに安堵しつつ彼は魔力を解放。奇襲をかけた当初から組み上げてきた術式を解き放つ。

「もう遅いよ。……受けてもらう、アークボルト『天雷』！！」

その場にいた盗賊たちは逃げる暇もなく、雷光が彼等の体を駆け巡った。

旅路 ― 盗賊との戦い（下）―

眼前に展開されている予想外の出来事に、驚愕で呆けた面を晒す魔導士が術式を組むのも忘れて虚ろな声で漏らす。

「馬鹿な……こんな乱戦の最中、『隠式』を上乘せした魔導を使つたつてのか!？」

魔導士の言うとおりである。ヴァンが使ったのは『天雷』という名を付けられた雷撃を発生させる魔導であり、そしてその式を『隠式』でもって隠して術を組み上げているのを分からなくさせたのだ。攻撃用の魔導に『隠式』を組み合わせることにより、その魔導は一種の罠であるかのような効果を持つことが出来る。しかもそれは『隠式』の魔導を見破れなければ見つけることができない。

（と言っても、これをするのは賭けだったけどね……）

ヴァンは胸中でそう漏らす。

魔導を使うには精神を以って世界に働きかける作業が必要になるためどうしても集中をそちらに割かなければならない。しかもそれが二つ同時、『隠式』に『天雷』を使い維持するとなれば尚更で、更に悪いことに戦っている中でも集中を切らさないことが求められた。

今のヴァンは、ある程度の大きさの魔導を二つ以上同時に組むことは出来ない。規模が小さければ話は別だが、しかし多くの盗賊を倒すためにはどうしてもある程度の大きさを持った魔導が必要だった。そのためにわざと自分にかけた『隠式』を切って身を晒し、一人という侮りもあるだろうと読んで盗賊たちが自分にめがけて集まってくるようにさせたのだ。

もし集中を切らしていれば、それか盗賊側の魔導士に『隠式』を見破られていれば、一巻の終わりだっただろう。だがヴァンは全ての困難を乗り切り、策はうまくいった。

ふと下に目を落とす。切り伏せた盗賊の返り血によって剣だけで

なく、自分の手にまで血にまみれているのが視界に入ってきた。気持ち、心に冷や水がかけられたような感覚が体に起きる。背筋に震えが走り、手には冷や汗が滲んだ。

（また、か……）

気持ちを奮い立たせてその感覚を追いやる。それは人を殺した際に付きまとう、恐怖だ。

別に今日始めて人を切ったわけではない。故郷の村にいた頃から自警団として働いていたこともあり、その活動の中で小規模であるが盗賊といった村を荒らす者たちと戦ってきたのだ。戦いの経験、人を切った経験はヴァンにもある。

だが、いくら戦いを重ねても人を切るたびにこの感覚が起きてしまう。

情けないとヴァンは思う。騎士になることを志したときから、人を切る事を覚悟していたはずなのに。時にはこの感覚に負けて吐いてしまうことすらあった。

（でも、僕はそれに負けるわけには行かない）

しかし、ヴァンはそれでも耐えてきた。騎士になるという望みを捨てないで来た。心を強く持ち、震えを強引に押さえつける。恐怖に耐え切らんとする心が、体中に湧き上がってくる。

理由は簡単だ。人を守るという幼いころから望んできた大願を実現する、ただそれだけのため。しかしただそれだけのために、ヴァンは自分の意思を貫くことが出来るのだ。

ヴァンはきつと前を見つめる。そこにあるのは迸る紫電に体を焼かれ、倒れていく盗賊たち。ヴァンの前には魔導士と袋を担いでいる巨漢までの道が開けている。

今、ヴァンの邪魔をする者は何もない。

（力のない人、僕の大切な人たち、旅の途中で見てきた平和な風景。それを守るためなら）

「僕は、戦い抜いてみせる……！……うおおおおおおおおおおおおおおお……！！！！！！」

天まで届けと言わんばかりの咆哮を上げ、ヴァンが突撃する。恐怖にも負けない強い意志、守りたいという幼いころから持ち続けた志を体に漲らせて。

ヴァンの氣勢に「ひ！」と喉がつぶれたような声をあげる魔導士たち。巨漢もまた怯え、剣を抜こうとするも片手が塞がっていたために対応が遅れる。

そこに、一閃。

巨漢と魔導士達の膝が崩れ落ち、血を噴出して倒れる。そして落ちてきた袋をヴァンは受け止め、ゆっくりと地面に下ろす。

周りで起こっていることが分からず混乱しているのか、袋がごそごそと蠢く。それにヴァンは

「怖がらなくていい。助けに来たんだ、僕は」

と安心させるためにできる限り優しく声をかける。そしてその袋を背にして残り僅かになった盗賊たちに向け、言った。

「どうする？ まだ続けるのか？」

静かな口調。しかしそこに込められているのは盗賊たちに対する怒り。人に身勝手に理不尽をもたらす者達への、憤怒だ。それに込められている迫力は並大抵ではなく、向かってこようとしてきた盗賊達の足はいつの間にか止まっていた。

「続けるならそれでもいい。捕まっていた人も解放したことだし、最後の一人まで相手をするよ。でも、今まで戦ってきて僕の力は知れたはずだ。もし生き残りたっと思うなら、降伏するべきだと思うけどね」

挑発するかのようというヴァン。それに対して盗賊たちはという
と、

「て、てめえ……」

「お、俺達はまだ四人いるんだぜ？ よく、そんな、こと……」
必死に虚勢を張ろうとするも、その言葉が尻すばみになって消えていってしまうのだ。既に及び腰になっており、仲間を殺され、怒っていたはずの盗賊でさえヴァンの迫力に飲まれているほどだ。

その様を冷たい視線で見ながら、ヴァンは続ける。

「だから言ってるだろう？ 戦いたいのなら戦っても構わないって。そんな風に思ってるならかかってくればいいじゃないか」

「……」

誰も、何も言い返せない。そしてヴァンは、短い、最後の宣告を言い渡す。

「……これが最後だよ。降伏、するんだ」

有無を言わさない命令。盗賊たちは怯えた表情のまま顔を見合わせ、手に持っている武器を捨てていく。

今度こそ、盗賊たちはヴァンの言うとおり降伏したのだった。

「じゃあじつとしてて。今出すから」

適当なもので降伏した盗賊たちを縛りつけた後、ヴァンは袋の中にいる人間にそう呼びかけた。彼が手に持っているのはナイフ。これで袋を切り裂くのだ。

ヴァンは片膝をついて袋を切り取っていく。当然袋の中にいる人にはヴァンがする事を話してある。幸いヴァンの言ったとおりにしてくれるようで、動く様子がない。そのため作業は順調に進んだ。

やがて袋を切り裂き終わる。中から出て来たのは、青みがかった緑という見慣れない髪の色を持つ少女だった。

年はヴァンより一つか二つくらい下だろうが、しかし足首まで届くような長いスカートにこれまた裾の長いワンピースから僅かに見えるその肌は瑞々しく、しなやかな肢体と大きな瞳に似合った流麗な曲線を描いる小柄な顔が可愛い。不安げに揺れている瞳も保護欲か、もしくは人間によっては嗜虐心をさそうだろう。

誰がどう見ても文句の付けようのない美少女である。その可憐さに、あまり女性に関心のないヴァンでさえらしくもなく見惚れかけるが、しかし少女が

「……もしかしてあなたが、私を助けてくれたんですか？」

周囲を見回した後で聞いてきたため、ヴァンは正気に戻った。頬

を染めつつも、その問いに「うん」と言って答える。

すると少女の顔に花が開くかのような笑みが浮かび、すごい勢いで身を乗り出して手を握ってきた。

「ああ、ありがとう！　なんてお礼を言えばいいんでしょう。私、あのままだったらあの人たちに何されてたか！」

嬉しさのためか手を握ったままぶんぶん縦にふる少女。意外に力が強く、ヴァンの体もがくぐんと上下に動く。

「うわわわわ！　ま、待った！　嬉しいのは分かったから、ちょっと止めて！」

「あ、ごめんなさい。つい嬉しくて……」

慌てて手を離す少女。ヴァンは「い、いや、大丈夫」と返した。散々揺さぶられたせいで頭がまだくらくらするが、まあ問題はないだろう。しかしこの細腕のどこにこんな力があるのかと思う。

（……それにしても……）

改めてヴァンは少女を見る。どうしても少女の可憐さに目が引かれてしまうが、しかし今気になるのは少女が着ているこの服装の方だ。

見る限り、旅をしたり山を登ったりするためのものではないと思える。話でしか聞いた事がなく見たことは無いが、盗賊に捕まっているあたりからもしかしたらどこかのお嬢様なのかもしれないとヴァンは想像した。しかし、そうなるときになることが出てくる。

「……あの、どうしたんですか？　そんなに私をじつと見て……」

すると少女が不安げに聞いてきた。ヴァンははつとする。どうやら不躰に見すぎているらしい。慌てて頭を下げた

「ご、ごめん。ちょっと気になったことがあったから。不躰に見てごめんね。……そういえば自己紹介がまだだったっけ。僕の名前はヴァン。エルザリアを目指してる旅の途中なんだ。よろしくね」

「あ、私はヴィントと言います。助けていただいたのに名乗りもせず、申し訳ありません」

しょんぼりとした様子でヴィントが頭を下げる。

「ああ、別に気にしないで、ヴァイントさん。それだけ助かってほつとしたってことなんだろうし、そんなこと誰も責めないよ。……ところでちよつと聞きたいことがあるんだけどいいかな？ あ、もしかしたら答えたくないこともかもしれないから、その時は言つて？」

「？ はい、何でしょうか……？」

「うん。……あのさ、どうしてヴァイントさんはこんなところで盗賊に捕まっていたんだい？ その服装からして山を越えるためのものじゃないし、君みたいなの……外れていたら悪いんだけど……お嬢様が一人でいるなんて考えづらいんだ。だからそこらへんのことを聞かせてもらつとありがたいと思つて。どの道この盗賊たちを皆まで連れて行く必要もあるし、その際に事情を説明しなくちゃいけないと思つからさ」

先程思つた疑問を口にするヴァン。するとヴァイントの顔が曇つた。ぎくりとして慌ててヴァンは頭を下げる。

「ご、ごめん！ 何か言いたくないことがあるんなら言わなくていいから！」

「あ、いえ！ そういうわけじゃないんです。ただ盗賊に連れ去られたときの怖さを思い出してしまつて……大丈夫です。話せます」

そういつてから、ヴァイントはぽつぽつとそのときの状況について話し始めた。

ヴァンの推測の通り、彼女は名のある家の娘らしい。何でも彼女の家の用事で、しかも明日か、もしくは明後日のうちにこのファレナ山脈を越えていかなければならない場所があつたそうだった。

そこで彼女はこの山の向こうにあるヴァンが立ち寄つたのとは別のもう一つの宿場町で馬車と護衛を用立てて、そして明日か明後日中との条件に対する焦りもあつたせいで、今日の夕方ごろに山を登り始めたそうだった。

しかしそんな時間に山を登り始めるのは盗賊たちにとってまさしく餌食にしてくれて言っているようなものであり、山の山腹辺りで案の定襲われた。

今までの話から、ヴィントにも落ち度があることは分かる。幾ら条件の日にちに間に合おうと焦っていたとはいえ、夕方辺りに山に入るなど盗賊のことがなくても危険なことだ。そういう意味では自業自得とも言えるのかもしれない。

だが、ここからの話は自業自得の部分を消すほどにひどい話だった。これを聞いたヴァンはあまりの酷さに憤慨する。

「そんな……そんなことって……」

同じ事を繰り返して言うヴァンの手は、怒りのあまり震えていた。「護衛として雇われたのに、襲われたら真っ先に逃げるなんて……！」

……そう。彼女が雇った護衛たちは、盗賊達の数が自分達より多いこと、そして彼等の中に魔導士がいる事を知るや否や、彼女の事を無視して真っ先に逃げ出したのだ。

「はい、それで私は彼等に……」

自分を抱いて話すヴィント。たまらずヴァンはその肩に手を置き、「でも、もう安心して」と語りかけた。

「これからは僕が君を守るから。皆まで行けば君を保護してくれるだろうし、家のほうにも連絡を取ってくれと思う。それまで頑張ろう?」

「……はい、ありがとうございます。でも私は幸運ですわ。見ず知らずの私を、こんな数の」

ちらりと、縛られて転がされている盗賊たちを見るヴィント。

「盗賊たちから助けていただいたばかりでなく、皆まで送り届けても下さるなんて……確かヴァン様とおっしゃいましたね。貴方は一体……」

「……そんなに堅苦しくならないでいいよ。僕が君を助けたのは当然の事をしただけ。そうじゃないと、僕は僕が目指すものになれなくなるから」

「え?」

「言い忘れたけど、僕は騎士を目指してるんだ。エルザリアに向か

うのも、その一環。騎士になってゼノン様を助けるって、そして力のない人を、僕の大切な人たちを守るって決めたんなら、これぐらいの事はしなくちゃ」

「まあ……」

ヴァンの話を聞いて驚いた顔になるヴィント。そしてその後、くすりと笑みをこぼした。

「そうだったんですか……立派ですわ。貴方は見た感じ、私と同じくらいの年でしょう？　なのにそこまで思い決めているなんて」

「別に今初めて思ったことじゃないよ。それこそ子供のころからそうなるって決めてたことだから」

「ふふ、それでも十分立派なことですね。……改めて御礼を言わせていただきますね。私の危難を救っていただき、ありがとうございます。未来の騎士様」

そうついてヴィントは深々と頭を下げた。「だからそう堅くならなくていいって」というヴァンだったが、しかし胸にこみ上げてくる一種の満足感是否定できなかった。

当然だ。目指すものに、一步一步、着実に近づいている感触があったから。心に決めたことに反していいなと思えるから。

（……まあ、いい気になるのはまだ早いのは分かっているけどね。でも、やっぱり嬉しいものは嬉しいか）

浮かれそうになる気持ちを抑えて、そう思いなおす。そしてこの後の事を考え始め、出した結論をヴィントに伝えた。

旅路 ― ヴイントー ―

伝えたのは、朝になるまでこの場所にとどまる事だ。まだ暗いため、自分は大丈夫でもヴィントにとつては歩くのに危険と判断したのだ。それにヴィントも頷き、承知してくれる。火を起こし、そこにヴィントを連れてきて休ませた。後は……

（とりあえず、ね）

ヴァンは捕らえた盗賊達の一人、金髪で年齢はヴァンより少し上の二十歳くらいだろうか、に近づく。そして

「ちよつと聞かせてもらいたいことがあるんだ。……お前たちのアジトはどこにある？」

と訊ねた。訊ねられた盗賊は露骨に顔をしかめ、「言うとも思つてんのかよ」と吐き捨てる。

「……いや、素直に話してくれるとはさすがに思つてないよ。でもこれから皆まで連れて行くし、そのときに皆の守備隊が聞いてくると思うから、どっちにしる変わらないと思うよ？」

「だったら尚更吐くわけがねえだろう。ただでさえ俺達は仲間を殺されて、てめえ一人にやられてんだ。情けねえつたらありやしねえ、それでもしアジトの場所なんてばらしでもしたら、例えてめえや守備隊の連中から逃げられてもどんな目にあうか分かったもんじゃねえよ。……ち、それにしても動きづれえな」

後ろ手に縛られて身動きがとりづらいせいか、身じろぎする。

「……それにしてもご大層なお題目言つてやがったなあ、おい」「え？」

いきなり振られた話題に、ヴァンは戸惑った声を出す。ヴァンに言い放った盗賊は、にやにやと、彼を嘲笑うかのような笑みを浮かべていた。

「一体何を言つて……」

「なあに。さつきそこのお嬢さんと話してたのが聞こえただけです

よ、未来の騎士殿。天帝ゼノン様の助けになりたいなんてなんとまあ立派なことだ」

そしてわざと慇懃な口調で言い、ヴィントと交わした際に使った言葉を口にした。その言葉には露骨な悪意が滲んでいる。

「しかしですなあ、そこでお聞きしたいんですが、そのゼノン様は本当に助ける価値がある方なのでしょうかねえ？」

「……どういう意味？」

「そのままですぜ。あんたがそこまで熱心に語って助けるほどの奴なのかってことですよ」

盗賊は口元をゆがめ、ニヤニヤとした笑みを浮かべる。しかし、それとは反対に彼の目はまったく笑ってなどいなかった。

「世間じゃあの方は色々と言われてますなあ。やれ天帝だの、“闇”を終わらせた人間だの、アウグストウスだの。どこを見ても褒め称える言葉ばかりでまるで欠点なんて見えやしません。ですがね、結局どんなに褒め称えても」

口元から笑みが消え、

「奴は、そんなご大層な奴じゃねえってことだ!!」

言い放ったのは、そんな言葉。

いつしか周りにいる盗賊たちも二人が話していることに気付き、盗賊をもてはやすかのように「そうだそうだ!」「いいぞ、ラルフ!」と声をあげるようになっていた。

「ちよつと聞くがよ、てめえの故郷はどこにある? なんとなく想像はつくが、言ってみるよ」

「……ラゼリアにある、セルベ村、だけど……」

「おお、そうかいそうかい。セルベ村つてのは知らねえが、あそこはいいよなあ。まるで戦がねえんだ。だがよ、俺がいたところはどんなところだと思う?」

「……」

「東と南の国境だ! ときどき東の方からやってくる蛮族どもに、いつも脅えてるな!!」

あからさまな憎しみと嫉妬を込めて盗賊、ラルフは言う。

「平和ボケしてる場所の出だからな。どうせ知らねえと思うから教えてやるよ。吟遊詩人どもや狂信者どもは今の世が平和だとか抜かしてるんだろうが、実際はそんなことありやしねえ。国の中や国境、いろんなところでまだまだ争いは起きてんのさ。そして俺たちの故郷ではゼノンが平和のためとか言ってるその蛮族とも交渉してやがる。そのほうが被害が少なくてすむからとかいってな」

だが、とラルフは続けた。

「確かにこれからのためにはそうした方がいいかも知れねえが、だったらそれ以前に巻き込まれた連中はどうすりゃいいんだよ!! 村を焼かれた、家族を殺された連中はなあ!!」

「……まさ、か、あんたたちは……」

「ああそうさ。俺たちの故郷はもうねえんだよ。なにもかもあいつ等に焼き尽くされてな! そして流れ流れて、やっとこさここまで来たってわけさ!」

自分の内にある鬱憤を撒き散らすかのようにラルフは叫んでいる。その声はとどまるところを知らずに大きくなっていった。

「なにが天帝だ、アウグストウスだ! そこまで言われてる奴なら、蛮族どもを滅ぼしてでも俺たち全員を救って見やがれてんだ! 結局奴は自分の名前を保ちたいだけの偽善者だ。ご大層な名前に合うだけの力もねえ。だから俺たちは奪うのよ。奴が俺たちを助けてくれねえんなら俺たちは俺たち自身で自分を助ける。その事を誰にも文句なんぞ言わせねえ!!」

ぎろりと、ヴァンに目を向ける。

「しかもてめえ、戦つてるとき気付いたが手が震えてやがったな。どうせ戦いが怖いとか、人を切るのが怖いとかいってる口だろう!」

心に恐怖を抱えていることを見抜かれたヴァンは下唇をかむ。それを見たラルフは、大きく嘲笑した。

「ハハハハハハ! やっぱりか! だがそれなら納得だ。そりゃ

ああの野郎に憧れるわけだぜ。てめえもあの野郎と同じで、口では綺麗事をほざいてるだけ、名前にすがりたいだけの偽善者ってワケだ！！」

「……」

「何の苦勞もしない、戦も何もしらねえ青臭えガキがしゃしゃり出て、一丁前の口を利くんじゃねえよこの偽善者野郎が！」

ヴァンに侮蔑の言葉を吐く。その勝ち誇った表情からは、世間知らずのガキをへこませてやったという下卑た満足感が如実に表れていた。本来ならば、年長としてそれを教える立場に在るというのに、だが、彼等は思い違いをしている。ヴァンは、なるほど、今まで村の外に出ていなかったただけあって世間を知らない。それは事実だろう。しかし、

「……僕が青臭いのは分かってるよ。それに、世間知らずだって言うのも多分当たってるだろうね。今まで故郷の村から出たことなんてなくて、その外のことと実際に見聞きしたことなんてないに等しいんだから、僕の口から出る言葉なんてあまり意味が無いのかもしれない」

「ハッ！ よく分かってんじゃねえか！！ だったら「でも」！？」「それなら僕からも聞かせてもらうけど……そのどこがいけないの？」

逆に問い返され、盗賊の方が返答に詰まる。

「そ、そりゃ、おまえ……自分で言ってたじゃねえか！ テメエの言葉なんぞに意味なんぞねえってよ！」

つつかえながら、何とか答える。しかし、ヴァンは動じない。

「そうだね。でも、だからって僕が口を開いたら駄目だって言う理由にはなっていないと思う。だから何度もいうよ。僕は騎士になつてゼノン様を助けて、そして力のない人たちを助けたいって。それが、僕が小さいころから願っていたことだから」

「……！！ ま、負け惜しみを言いやがって……」

「それに、確かに僕らがいたラゼリアでは戦はなかったよ。そうい

う意味では恵まれてるんだと思う。でも、だからって生きていく苦
労がなかったってわけじゃない。天災に見舞われたことだって、盗
賊に襲われたことだってある。でもそのたびに皆で協力したり、そ
れか村を治めてる領主様が助けてくれたりしたんだ。例えば境遇が酷
くて、ゼノン様をそんな風に思うのも仕方が無い状況だったとして
も……自分達が不憫だから人を害するなんて、ただの言い訳だ。あ
んた達してるのは、ただの略奪と、人殺し以外のなんでもない」
「な!？」

「違うの？ 少なくとも僕は、そんな事をするのはいけないことだ
って父さんたちから教わった。そしてそういうこと教えてもらうの
は、あんたたちだって同じでしょう？ そして、人に害する事をす
るのはいけないことだって考えるのも同じのはずじゃないの？」
とうとうと語る。

いつしかヴァンは、さつき盗賊たちを威圧した記と同じ様な雰囲
気を漂わせるようになっていた。幼さが残る顔には、静かだが、は
つきりと息づく怒りが宿っている。

「そしてそれを防ぐために、僕は人の命を奪ってでも守る事を選ん
だ。……まあ、あんたの言うとおり人を切ることが怖いって感じて
るのも事実だけだね。戦ってるのにこんな事を考えるなんて、偽善
って考えられてもおかしくないのかもしれないよ。でも、それでも
僕は守りたいって思ってる。僕が怖いって思うことなんかより、人
の命を助けられた方がよっぽどいいんだ。だったら矛盾だってなん
だっていい」

「……」

「それに、さつき言ってたけどあんた達は自分達が辛い目にあっ
たからこんな、悪事を働いてもいいんだって言ってたけど」

なら、とヴァンは続ける。

「あんた達の事情と関係のない、力を持っていない人に向けてるの
はどうしてなのさ？」

「何だと？」

「僕だって大切な人たちの命を奪われたら怒るし、もしかしたら復讐だって考えるかもしれない。でも、そうだとしたら何でその人たちを奪った人たちに憎しみを向けないんだ？」

「……！」

言われた瞬間、ラルフの体が強張った。それを見て、ヴァンは確信する。そして、心底あきれ果てたといわんばかりの目を向けた。

「なるほどね……つまり、復讐をしたくてもできないんじゃない。単にそれをするだけの勇気も、そしてそれをごまかすのに都合がいっていうだけの理由で、ゼノン様を悪く言っているだけなんだ」

そして、最後に

「……逆恨みにもほどがある」

そう呟き、目をそらした。もう目にも入れたくないといわんばかりの態度。

ラルフは怒りに震えている。

「て、めえ……世間知らずのガキが、言ってくれるじゃねえか……」
歯噛みし、ラルフはどす黒い憎しみを込めた目でヴァンを睨みつけた。

「俺たちの苦労も、何もしらねえくせに……」

「……そりゃあ知らないよ。今あつたばかりだし、僕はあんたたちの故郷がどうなってるのかもまったく知らない。でも、そんなことは関係無しにいえると思ったから言っただけだよ」

「……へ、ご高説どうもありがとうよ」

しかし、そこでラルフは、なぜか笑みを口に上らせた。怪訝に思い、ヴァンの眉が一瞬はねる。

「なにがおかしいのさ？」

「いや、なに……最後の詰めが、随分と甘い騎士様だと思ったのさ……！」

そうラルフが叫ぶ。すると、その直後。

「きゃあああああああ！」

ヴィントの叫び声が響き渡った。

「え！？」

何事かと思い、急いで振り向く。

そして振り向いたヴァンの視線の先には、ヴィントと、その後ろに回りこんで彼女の腕をひねりあげている盗賊の姿があった。その盗賊はひねり上げている方とは別の腕でヴィントの首にナイフを当て、「動くんじゃねえ！」とヴァンを脅してくる。

「そんな！ 盗賊は皆、捕まえたはずなのに、まだ残ってるやつがいたなんて！」

「くくくく、そんな簡単にいくかよ」

むき出しの悪意を含ませて、ラルフは笑う。

「てめえが人質を取り戻しそうだったって分かったときに、一度離れるように言っておいたのさ。そんでてめえが人質から離れたのを見計らって合図したのよ。後は忍び寄っていけば良いだけだ」

「……！ まさか、あの体を捻ったときか！？」

「ご名答。俺たちは夜目が利くんぞ。あれだけで十分通じたぜ。」

……さて、形勢逆転だ。言っとくが動くんじゃねえぞ。俺たち全員の目でてめえを見てるんだ。勿論魔導なんて使うんじゃねえぞ。そうでなくても下手な真似しやがったら、お優しい未来の騎士様ならそんなことできやしねえだろうが、その瞬間あの女の命がなくなると思え！」

「……ッ」

ぎり、と歯をかみ締める。ラルフの言うとおりだ。最善の状況から一変、最悪の状況だった。

魔導を使って助けようにも、ヴィントを捕まえている盗賊との距離が近すぎる。これでは発動させた瞬間に巻き込んでしまうだろう。自分の体を動かすのは更に論外だ。ヴァンの近くに転がされている四人の盗賊達の目と、ヴィントを捕らえている盗賊の目。計十の目がヴァンに対して注がれている。これほどまでに集中して視線を注がれれば、どれほど慎重に体を動かしても気付かれてしまう公算が高いだろう。

（くそ、油断した……！）

ヴァンは悔しさに拳を握り締めた。まだ盗賊が残っている。そんなことくらい、考えの内にに入れておくべきだったのに！

「さあ、武器を捨てやがれ。そして俺たちを解放しな。ああ、別にしなくても構わないんだぜ？ どうせあの女が一人犠牲になるだけだ。それでいいんだったら、だけどなあ！」

「く……」

脅迫に、どうするか迷うヴァン。ここで武器を捨てて彼等を解放すれば、自分は殺され、そして彼女にはまた悲惨な運命が待っているだろう。しかしだからと言って、見捨てることなどヴァンにはできようはずがない。たまらず、せめてヴィントを捕まえている盗賊が油断している瞬間でもつかめればと、視線を二人に移す。

だが、そこで

「……え？」

ヴァンは、ありえないものを見る。

さっき悲鳴を上げ、捕まっていたヴィントが——笑っていたからだ。そして

「……あーあ、お姫様の役も終わりか。結構楽しかったのに」

という、ヴィントもので間違いないはずなのに、まるで調子の違う声が響いた——その刹那！

「がはあ！？」

ヴィントはその場で回転し、勢いをつけた蹴りを捕まえている盗賊に叩き込んだ！ 吹き飛ばされ、木に叩きつけられて気を失う盗賊。

「……は？ な、なんだあこりゃあ……！！？」

目の前におきていることが信じられず、盗賊たちは意味の分からないことをただ叫ぶ。

「うるさいよ、下種ども」

そこに冷たい声が飛び、同時に魔導の文字列が現れた。それは彼等に何をする間を与えず発動。一瞬凄まじい烈風が吹き荒び、彼等を木に叩きつけられた盗賊と同様、吹き飛ばして気絶させた。

「……」

ヴァンは突然のヴィントの豹変についていけず、ただ立ち尽くす。「はあい、ヴァン。そんな風に突っ立ってないの。一応あたしを助けてくれたんだから、もっとしゃんとなって」

そこにヴィントは、さっきまでヴァンと話していたときは明らかに違う、しとやかと言うより朗らかといえる笑みを浮かべ、声をかけてきた。

「ちよつと詰めが甘かったのは減点だったけど、ま、さっきの啖呵はかっこよかったし、一人であそこまでの人数相手にしたって事はほめてあげてもいいわ。やっぱりあたしの見込んだとおり、中々骨があるみたいだし」

うんうん、と一人で頷いて勝手にヴァンの評価を付け始める。

「……ね、ねえ、君、本当にヴィント？」

ヴァンは辛抱できず、ついそんな事を聞いてしまう。それに「うん」とあつさりと答え、

「あ、でも言つとくけど」

前置きし、

「さっきあんたに言つた貴族云々ていうの、全部嘘だから」と言つた。

旅路 ― ヴイント 2 ―

「じゃあなに？ 馬車に乗っていたところを襲われたのは本当のことだけど、それ以外全部……」

「そ、ぜーんぶお芝居。あたしの目的は最初から盗賊に襲われることにあつたってわけ。護衛に雇つたっていう連中もみんなあたしの配下みたいなもんで、巧く演技してくれたわよ」

けらけらと笑い、ヴァンに昨日のことをヴィントが説明していく。彼等は今、ファレナ山脈の街道を警護する砦の、その門前にいる。昨日ヴィントが豹変し、一瞬で盗賊たちを吹き飛ばしたのを目の当たりにしたヴァンは当然混乱した。何が何だか分からないから説明してくれとずっとヴィントに詰め寄っていたのだが、それを彼女は「あゝはいはい、でも疲れてるし後でやってあげるから今は寝る。それでこいつ等を砦まで連れて行ったら話すわよ」と取り合わなかったのである。

いくら詰め寄ってもまるでこたえる気がないようであつたし、それに彼女の言うことももつともであつたためその時は寝ることにし、翌朝彼女の言うとおり盗賊たちを砦まで連れて行つたのだった。

そして今、砦の守兵に盗賊たちの引き渡しを行い、門番の兵士が「彼等をどうするかが決められている間、ちよつと待っていてくれ。報酬として金一封くらいでと思うから面倒だといって離れないでくれよ」と言つて引つ込み、待っている間手持ち無沙汰になつたため、ようやく説明を受けられたというわけである。

「しかし、とんでもない子がいたもんだ……一人でそんなことをするなんて……」

ヴァンは呆れているかのような口調で呟いた。しかしそこでふと疑問に思うことが出て来た。それを口に出す。

「あれ？ ちよつと待って。ヴィント、聞きたいんだけど、なんでそんな事をしようなどと思つたのさ？」

「？ 何でって？」

「いや。だつてさっき言つてたけど、護衛の役をしていた人つて君の配下みたいな人たちなんでしょ？ だつたら君一人で動いているというわけじゃなくて……いや、もしかしたらそれも嘘なのかもしれないし、それに単に雇つたつてだけなのかもしれないけど……」

「でも、そこまでのことが人一人の力やお金で出来るとも思えないんだ。もしこの考えが正しかったとしたら、君はどうかの組織に属してて、君に指示を出した人がいるはずだよ。そしてそんな事をできるか、していいのなんて……」

「……へえ。なかなか鋭いじゃない」

ヴァンの考えを聞いていたヴィントは、そこで感心したようにつぶやいた。

「そういえば盗賊と戦っているときも巧く立ち回つてたつけ。元々の力の差や運もあつたんだろうけど、でもそこまで頭が回るのはさすがってとこか」

でも、とヴィントは続けた。

「なかなかいい推測だったけど、これ以上は何を聞かれてもあたしは喋らないわよ。まーそのご褒美としてあたしに指示をした人間がいるってことだけは認めてあげても良いわ」

「……そう、なんだ……」

「ええ。けどもうこれ以上喋つたらあの人の機嫌を損ねちゃうかもしれないし、それだけは避けたいから……ってあれ？ どうしたのよヴァン。そんなふういきなり顔をしかめちゃって。なんだか怒ってるみたいだけど」

ヴィントがあれ？ と言う顔になってヴァンに問いかける。そして問いかけられたヴァンは

「いや、だつてそりゃ怒るよ！ いくら強くたって、ヴィント、君は女の子だろう！？ なのになんと盗賊に捕まるような真似をして、なんかあつたらどうしてたのさ！」

憤懣やるかたないというかのように、大きく拳を振って言うのだ。
った。

それを見たヴィントはきょとん一瞬きょとんとした顔になり、ついで笑った。

「な、なによ、ヴァン。それってつまり、あたしが心配で怒ってるってこと?」

「そうだよ。当たり前じゃないか!」

「あはは、ありがとう。盗賊に一人で立ち向かったことと言い、猫被ってるときも言ったけど、そういうところは本当に立派だと思うわ」

そこまで言ったヴィントは、しかし次に笑いを収めて「でも」と言った。

「そこまで言うほどの力は、いまのヴァンにあるのかな? ……ヴァン、あんた、最後の最後であたしを助けられなかったじゃない」

「!」

その言葉に、ヴァンは言葉に詰まった。そうだ。確かに最後に油断し、ヴィントを危険にさらしてしまった。

「もしあの時あたしが本当に力の無いただの女だったら、あたしもあんたも多分ここにはいなかったらうね。あ、それともそんな事はないとか言う? あそこから挽回するつもりだったとかさ」

「……」

押し黙ったまま、ヴァンは彼女の言葉にゆっくりと首を横に振った。そんなことはできようはずもないからだ。実際、あの時は手詰まりもいいところだった。

（それにあれは注意不足なんて言葉で片付く問題じゃない……そもそも、守るべき人がいるのに注意を怠る方が悪いんだから……）

「あれ、随分素直じゃない。じゃあ認めるのね? あんたに力が無いこと」

「……うん」

「そう。ならあたしのすることに口をはさまないでくれる? それ

だけの力があなたにはないんだから」

「そう、だね……その通りだ……」

認めたヴァンは、そこで言葉を切った。そして

「なら今度は、僕が君を助ける。それで君を助けられなかったことを、償って見せるよ。だから、そんな危険なことを一人するのは止めてほしいんだ」

と断言して見せるのだった。

この返答は予想外だったのか、またしても一瞬きよとした顔になるヴァント。

「……へえ……そうきたかどうやって？ あたしほど力も無いくせに」

にやにやと笑いながら、まるでヴァンを値踏みするかのような目で見てくるヴァント。

それに怯まず、ヴァンは自分の考えを言う。

「それは分からない。……でも、幾ら力があつたってそれだけでいつも大丈夫ってわけじゃないはずだよ。一人じゃ敵わない相手だっているかもしれないんだ。そういうときには僕だって役にたてる」

「……」

「それだけじゃない。力以外のことだってそうだ。例えば、そうだね……知恵ってことでもいえると思う。まあ、知恵でも君には及ばないのかもしれないけど、でも一人で考えるより二人で考えた方がいい案が出やすいと思うんだ。だから、君からみれば頼りないかもしれないけど、でも僕が居ることで助けられることはきつとあるはずだよ」

「……けどそれって、それなりに力を持っていたらの話よね。力のないやつがついてきたところで足手まといにしかないわよ」

「なら、そうならないようになって見せるよ」

即答で返すヴァン。

そしてしばらくの間お互いの顔を見ていたが、やがて根負けしたかのようにヴァントは肩をすくめた。

「やれやれ……随分と強引なこと。でもとりあえずは感謝しとくわね。そんな風に心配してくれるのって、悪い気分じゃないし。けど何度も言うように、あたしはそんなに弱くないからね。この程度のこと、あたしが全力を出すほどのものでもないんだから」

胸を張ってふんぞり返る。

「だからこそういいう役回りも任されたのよ。それにか弱いお嬢様役っていうのも中々面白くてね。ちよつと涙ぐんだり怖がったりするだけですぐに引かかって警戒も何もなくなっちゃうし。あーあれは面白かった!」

「……」

満悦した様子で言うヴィントを見て、まんまと騙されたヴァンは「僕もあいつらとおんなじなのかな……」と少し憂鬱になった。

「で、騙された盗賊に捕まった振りをして、そのまま奴等のアジトまで連れて行ってもらうつもりだったんだけどね……まさかこうもタイミングよく……あれ? こういう場合って悪くっていいのか? まあいいか。ともかくこんな時に助けが現れちゃうなんてね」
にやにやと笑う。

それにヴァンは、いたたまれなくなつて頭を下げるしかなかった。ヴィント一人を囚にすることに反感は持っていても、彼女が作っていた段取りを壊してしまったのは自分なのだから、そこは謝るしかない。

「……ご、ごめん……」

「おつと、そう頭を下げてもらう必要はないわ。まああんなふうな状況に出くわして、事情も知らなかったら誰だって……ていうこともないか。味方はあんた一人で、敵はうじゃうじゃいる盗賊。普通なら助けを求めたり見過ごすなりすると思うのに、それをたった一人で助けようとしたんだもんね。……でも、」

そこでヴィントは、突然ヴァンのすぐ前まで歩み寄って下から見上げるようにしてきた。間近で見えるその可愛らしさにヴァンの鼓動が早まる。

「ちょ、ちょっと……！」

「だからこそあんたの盗賊に言った言葉、かつこよかったよ。さっきあたしにガツンといった言葉も含めてね。だからあんたのことがとても気に入った。これは、その分のご褒美ってとこかな」

そう言つて顔を伸ばし、

唇に、唇が触れた。

(……何だろう、今の感触？ それに何でヴィントの顔がこんなに近くに……)

ヴァンは突然の感触に、そして目の前で繰り広げられている光景に頭が働きが止まるのを感じた。というか、理解が追いついていないといった方が正しいのかもしれない。

そしてヴィントが唇を離してから更に時間がたつてからようやく自分がされたことに気付く。

(唇に唇がふれて、つまり……キス、された！？)

その瞬間、一気に彼の顔が赤くなる。そして手足がわたたと勝手に動き、口からは「うわわわわわわわ！？」というわけの分からない言葉が出てくるのだった。

「わー面白い。こんな反応してくれるんじゃないかなーって思つてやつてみたけど、実際思い通りになるなんてね」

「そ、そんなこと言つてる場合じゃないだろう！ こ、こんな風に気軽にキス、するなんて……」

「だつてしたくなつたからただけだし。それともあたしじゃキスされても嬉しくない？」

少女の外見とは裏腹に妖艶に笑つて、しなを作りながら問うて来るヴィント。

彼女の服装は昨夜とはまるで違う、動きやすさを重視しているらしい太ももまでしかないズボンと薄い胴着で身を包んでいる。彼女曰く、これが本来着ている服装らしい。

しかし困ったことに、それらの服装は張りのある肌やしなやかで美しい曲線を持つ足をまるで隠していなかった。

その姿を見たヴァンはごくりとつばを飲んだ。そしてそれに気付いて慌てて目をヴィントからそらし、「か、からかわないでくれ！」と文句を言った。

しかし当の彼女は悪びれた様子なく「悪い悪い」と言っただった。「ま、確かにちよつとからかいすぎたかもね。……じゃ、そのお詫びをしますか」

「……え？」

「ちよつと、そんな警戒してるみたいな顔しないの。今度するのはキスするみたいな類じゃないんだから。ヴァン、あなた騎士になるためにエルザリアを目指してるんだったわよね」

ヴィントは「それなら」と前置きし、

「あたしがエルザリアを案内してあげるわ。お金をもらったら、一緒にいいこ？」

と笑って言うのだった。

天の都エルザリア ― 到着 ―

その後の旅は、とても順調に進んだ。

盗賊を捕縛した際に出た礼金も、彼等による被害は少ないもの、なかなか足取りをつかめずに困っていたために予想していたよりも多くのお金をもらうことが出来た。

更にヴィントが道案内の役を買って出てくれたため、道にも迷わず、しかも道中で色々な解説をしてくれたため、ヴァンにとってより楽しい旅になったことも言い添えておかねばなるまい。……まあ、キスのせいでヴィントに対する彼の態度が少々きこちなくなっていたことが唯一の難点であったが。

そして彼の予定通り、ヴァンは野宿の日から三日後の夕方にエルザリアについた……のだが。

「……ナニコレ？」

思わず歩みは止め、どこか調子の外れた声でヴァンは呆然と呟いた。

それをヴィントは、

「なにこれって、見れば分かるでしょ。これがヴァンの行きたいって言ってた、エルザリアだよ」

と言い、そのあとで立ち止まってないで歩くように急かす。

「あ、それとももしかして、ようやくついたってことで感動しちゃったとか？」

「い、いやそれもあるけどでも、何なんだこれ!？」

泡を食った様子で、彼は目の前にあるものを指差した。それを視線で追ったヴィントは、何を言ってるんだといわんばかりに首をかしげて言う。

「何って、ただの門じゃない。名前に『北天門』なんて大層なのがついてるけど、それにしただって門には変わりがないでしょ？」

「そういう事を聞いてるんじゃないってば! 門だけじゃなくて、

この街の大きさは何って聞いてるんだって！？　　というか誰もこの大きさを気にしないの！？」

誰から見ても混乱していると分かるヴァンはより大きな声でヴィントに、肩をつかんで前後にゆすりながらだが、聞く。

そうなのだ。

彼等の前には巨大な門と、そしてその先にそれを遥かに上回る巨大さを持つ建物がうじゃうじゃと聳え立っていた。しかもヴァン達のいる場所からでは門に邪魔されてこの建物の群れがどこまで続いているかも分からない。

こんな光景を見たことのないヴァンは興奮し、混乱し、そして怯えて、何がなんだかわらなくなっているのであった。

しかしヴァンとは対照的に、それを見てもヴィントは平然としており

「あーはいはいそうね」

と混乱したヴァンを適当に受け流した。そして「まあエルザリアとサンを間違えたくらいの田舎者だから仕方ないか……」と苦笑する。

ちなみにサンとはエルザリアの北に位置する防衛都市のことだ。

ついた途端、ヴァンが「これがエルザリアかあ……！」と感心した声を出してしまい、周囲の人間から変な目で見られるという余計な恥をさらしている。

「というか何度も言ってるけど早く歩く。ここに突っ立ってたんじや邪魔でしょうがないんだから」

そう言っただけは逆にヴァンの肩をつかみ、周囲で流れている凄まじい数の人の群れに、その移動する流れを合わせてエルザリアへと入っていく。

「怯えてるよりもさっさと慣れた方が良いつて。騎士目指してるんだっただけでここしばらくは生活するんだし、しかもこれからあたしが案内もしてあげるんだからそんなこと言ってるんじゃないわよ。あたしにあんな台詞いつてくれたんだから、それに掛けてみっともない

真似はしないでよね」

未だに混乱しているヴァンに注意を促す。この言葉はヴァンも無視できなかったのか、「そ、そうか。うん、そうだね」と言っ、必要以上に頷いて答えるのだった。

二人はしばらくの間、周りに溢れる人に合わせてエルザリアの中を進んでいく。その間ずっとヴァンは首をきよきよとまわしていた。そしてポツリと呟く。

「本当に何なんだろう……この都市の大きさと人の多さは……」

まるで小人にでもなったみたいだとヴァンは思う。さっきは門の外から見ていたため直に見たわけではなかったが、こうして近くで見るとやはり迫力が違った。

ある一定の範囲の中、ぎゅうぎゅうに詰め込まれているような感じを受ける建物の群れ。その一つ一つが故郷では見たことの無いほどに大きい。しかも調和を取るためなのか、同じ類の色で塗られた外観は雄大さとともに美しさすらも感じるほどだ。

また、その下では数えきれないほどの人々が動いており、商売を営んでいる者、ヴァンと同じく旅装をして鎧や剣を身に付けている者など様々な種類の人間がいた。しかもその中には竜人族やエルフのような亜人まで見かけるくらいだ。

感心し、畏怖しているヴァンはただため息をつくしかない。今まで見たことが無い人の多さと物に圧倒され、頭がくらくらしてくる。何とか押さえ込もうと、深呼吸をして気持ちを落ち着かせようとする。

「……やっぱり凄い？」

それを見たヴィントが訊ねてくる。ヴァンは頷いた。

「うん。というより、凄いなんてもんじゃない。凄すぎるよ。こんなに大きな街だなんて、想像もしてなかった」

「ふーん、そっか。……あ、そういえば初めてここに来た人って大概ヴァンみたいな反応するんだっけ。このところそういう人と話したこと無かったからすっかり忘れてた。門のところでヴァンが

呆けてたの見て思い出しとけばよかったかな？」

片目をつぶってちろり、と舌を出し、こつんと頭を軽く打つ。一方で、ヴァンはヴィントの言葉を聞いて安心していた。

「そ、そうなんだ。……よかったよ、こんなに驚いてるのって僕だけかと思っただからさ」

「はいはい、でもそれで安心したってなーんの意味も無いけどね。世間知らずには変ないんだから。それに考えてみれば、子供の頃から憧れてた割には一度も来なかったっていうのは変じゃないの？」

意地悪く笑って言う。ヴァンはいささか傷ついた表情になった。

「それを言われるとなあ……というか、こっちはこっちで事情があるんだってば。僕がいなくなったら父さんたちは二人で農作業しなくちゃいけなくなるし、こっちに来る前にできる限りの手伝いはしたかったんだよ。剣や魔導も修得しなくちゃいけなかったし、そんな暇なんか無いよ」

「……ふーん、随分真面目なんだこと。じゃああなたは生まれてから村でずーっとその三つをやってたってわけ？」

「うん。だから今回の旅は本当に楽しかったよ。今まで見れなかったものを色々見ることが出来たしね」

「あー、旅の最中あんななんでもかんでも物珍しそうに見てたもんね」

「実際、見たこと無いものばかりだったからね。今回の旅は、本当に実りがあるいいものになったよ。……逆に不安に思うことも出て来たけど」

楽しそうだった表情が変わって、暗くなる。ヴァンの頭にはファレナ山に入る際の失敗と、ヴィントが再度捕まったときの場面が浮かんでいた。

両方とも、嬉しくて浮かれていたときに起きた失敗だった。この事を考えると、騎士を目指すに当たってどうにも不安になるのは止められない。

ヴィントはヴァンが何を言いたいのか察し、不安を笑い飛ばすよ

うに言うのだった。

「あはは。まあそうくよくよしなさんなって。大丈夫大丈夫、あんならやってけるって。あたしが保障してあげるよ」

「……そういつてくれるのはありがたいけど……ならその根拠は？」

「あたしの勘」

「……」

「だからそう疑わしげな目を向けないの！　なによ、あたしの勘が信じられないってわけ！？」

「いや……普通に考えたら、勘なんてあまり信じられるものじゃないような気がするんだけど……」

「それはそれ、これはこれよ！　あたしの勘は特別なの！」

「自分で言うことなのそれ！？」

「自信があるんだもん、いいじゃない言っただって！」

「そんなの自信があればいいってものでもないでしょうが！　そもそも勘に自信があるってどういう意味だよ！？」

いつの間にか二人は声を大きくして変な言い合いを始めていた。

「自身があるものはあるの！　今まで生きてきてこれだなんて思った事はほとんど外れたことが無いんだから！　凄いでしょ！」

「……ヴィントって、見た目から判断して悪いけど多くて十七か、その下でしょ？　それでそんなこと言われたって……」

「だ……か……そんな目を向けるんじゃないの！　ああもう、変なことに拘って人のいうこと聞きやしないんだから！」

「変なことじゃないってば！　僕にとつては騎士になるのって切実もいところなのに、勘が根拠だなんていわれたら不安になるのは当然だって！」

「あたしのは特別だって言ってるでしょうが！　だったらあたしが気に入ったからって言う理由も付け足してあげるわよ！　これなら文句ないでしょ！？」

「あるってば！　というかどこをどうすればそんなに自信が持てるんだよ！？」

同じ事を繰り返して不毛な言い合いを続ける二人。

そして当然そんなことを人が大勢通り過ぎる往来で行えば、何事かと思つた人々の視線が集まつてくるのは当然と言つもので、ヴィントがそれに初めて気付き、「やば！」と呟いた。

続いてヴァンの手をがしりと握り、一気に駆け出す。

「え！？ ちよつと、ヴィント！？」

「今は黙つてる！ 騒ぎすぎちゃつてみんなあたし達のこと見てるじゃないの！」

「ええ！？ そんな！」

「早くここを離れないとまた変な視線浴びることになるわ！ さつさと走つてここから退散するわよ！」

「わ、分かつた！」

ヴィントの言葉に頷き、ヴァンもまた走り出すのだった。

天の都エルザリア ― 怠惰の小道 ―

走り出した二人だったが、人の流れから抜け出すのは中々に苦勞した。

なにしろ人の数が多すぎるのだ。

一人かわせばまた一人前を塞いでくる。その人にそんな自覚はないのだろうし、その人も流れに身を任せているだけなのだろう。しかしそれゆえに性質が悪い。

（うう、進みにくい……それになんだろう、なんだか気持ち悪くなってきた……）

ヴァンは額に手をついて辛さを紛らわそうとする。

思えばヴァンは今まで生きてきてここまで多くの人の中に入った事は無かった。そのためもしかしたらこの人の多さに慣れずに食あたりならぬ人あたりをしたのかもしれない。

だが、もしそうだとしてもなったタイミングとしては最悪もいところだった。

その理由は、ヴァンの前で彼の手を引いて走っているヴィントである。

気分が悪いせいか普段の速さで走ることが出来ないヴァンは、ヴィントについていけなくなりつつあった。

だが今そうなった場合、それはヴァンはこの恐ろしく広く、しかも道はおろかどんな建物や店があるのかすらまったく分からないエルザリアで道案内もおらず全て一人で調べて探索しなければならなくなってしまうのだ。

（この年で迷子だなんて絶対避けなきゃ……！）

もしなつたとしたら、情けないことこの上ない。

必死になってヴィントに食らいつくヴァン。だが、運命を司る神はヴァンに対して無常だったらしい。偶然、通行人の一人が繋いだ手にぶつかってきたからだ。

「あー！」

まずいと思い、手に力を入れる。しかし不意打ちにやられたために対処できない。

手が離れてしまう。

「ちょ、ちよつと！　おーい、ヴァンーーー！」

ヴィントが叫んで手を伸ばしてくるも届かず、その上周囲の人の流れは変わらないため、一度手を離してしまえばヴィントとはますます離れていってしまった。盗賊を倒すときに見せた怪力や身のこなしも、ここまで人が多いと発揮できないらしい。

とはいえ、状況は最悪だった。

（ど、どうしよう！　このままじゃ本当にこの年で迷子に……って
うわ！？）

また横から人がぶつかってくる。調子が悪いせいかどうも避けられない……というより避けるだけの隙間もない。

どうやら呆然として立ち止まっている暇すらないようだ。仕方なく歩き続ける。

（ともかく一刻も早くこの中から出よう。後の事はそれからいい
！）

人の流れにあわせて進み、そして流れが一旦途絶えたところで人が少ない方に流れるというやり方を繰り返すことにする。何度も何度もなれない場所で人に当たりながら、人数が少ない場所に出ようと言っただ。

そしてヴァンがようやく出られたときには日は暮れていた。道の端に並んで立っている魔導による明かりを灯す燭台が灯り始めている。

「よ、よかった……といっても何の解決にもなっていないんだけど」

安堵の吐息を漏らすも、しかしこれからどうすれば良いのか。脱出はできたものの当然、彼の近くにはあの風変りな案内人はいないわけで、その上夜が近づいている。

もしかしたら、宿をとることすらおぼつかなくなるかもしれない。

そう考えて、途方に暮れるヴァンであった。

「……でも、ここどこだろう？」

首を回して周囲を見て、そう呟く。

どうやら今いる場所は先程まで歩いていた大通りとは別の、小さな通りらしい。

ヴァンがいる場所からは、さっきまでいた大通りが見えた。きらびやかな街灯の、そして建物自体に施された魔導によって放たれる明かりが鮮やかな光の乱舞を作り出している。

それに対して、確かにこのあたりは人気が少なくなっていた。だが、先程まで歩いていた場所と比べるとあまりにも少なすぎる。：

「いや、そうではない。人通りは確かにあって、ヴァンにとってはまだ多いくらいだ。だが、

（なんだろう、この空気……）

とても嫌な感じがする……まるで深く濁った水みたいに粘り気があるような……それになんていうか、活気が、まるで無い？

街灯の明かりが少ないせいか、余計にその事を感じてしまう。先程までエルザリアの活気を感じていたヴァンは、同じ都市にこのような場所があるなど信じられない思いだった。

「あー！ やつと見つけたー！」

と、そこで後ろからけたたましいとすら言える声がかかってきた。振り返ると、そこには

「ヴィント!？」

はぐれたと思ったヴィントがいた。彼女はつかつかとヴァンに近づき、まず「まったく余計な手間かけさせないでよ！」と言う。そして「結構心配したんだから……」と、いきなりしおらしくなって言うものだからヴァンは対応に困ってしまった。

「そ、そんなこと言ったって……さっきのは不可抗力だよ！ いきなり横から当てられるなんて考えられるわけ無いじゃないか」

「だからってもう少し根性見せてくれたっていいじゃない！ 離れたら離れたで人を掻き分けてでもこっちにくるとかさ！」

「それを僕に言う!? だったらヴィントの方がやってよ! ヴィントだったら人をちぎっては投げちぎっては投げで僕の方に来れるでしょうが!」

「いくらあたしでもんなことやるわけないでしょーが! 人を凶暴女みたいになつての!」

「素手で盗賊ふっ飛ばしたりしたら十分凶暴だつてば!」

「……こんなときまでやらなくてもいいのに、言い合いになつてしまふ二人である。」

「はあ、はあ……と、とにかくこんなこと言い合つてる場合じゃないわ。運よくあんたを見つけれられたことだし、さっさとここを離れよ」

「そ、そうだね……それにしても良く僕を見つけれられたね。あれだけ人がいたところではくれたのに」

「手当たり次第に聞きまくったのよ。オドオドして首をぐるぐる回してる旅装の人間がいなかった。そうしたらすぐに相手も分かって教えてくれたわよ」

「……また余計なことといって……」

変な噂が立つたらどうしてくれるんだと思わずにはいられないヴァンである。

「仕方ないじゃない。離れたらどこまで離れるか分からなかったし、ともかくあんたを見つけなくちゃいけなかったんだから。それともこのだだっ広いエルザリアを案内も無しに回るつもりだった? だつたらすぐにあたしはどっかに行つてもいいんだけど」

「うわわわわ! それは困るって!」

「じゃあ余計なこといわないで感謝することね」

ふふん、と偉そうな態度で言う。

ヴァンはそれこそ言いたいことは山ほどあったが、しかしぐつとこらえた。

ヴィントの言うとおりな部分はあるのだし、なによりエルザリアの案内という弱みを握られてはどのようなもない。

（運がいいんだか悪いんだかわかんないなあ、これ……）

はあ、とため息をつく。

「分かったよ、もう余計な事は言わないって。……それにしてもさ、ここって何？」

辺りに視線を飛ばしつつ、ヴィントに訊ねる。

「とても同じ都市とは思えないくらい活気が違う……なんだか暗い雰囲気だし、感じが悪いって言うのか……」

さすがに回りに聞かせるわけにはいかなかったため、声の大きさは絞ったが。

「……まあ、そうね。といっても、ここにいる連中にとってはこれが当然みたいに思ってるんだろうけど」

「え？　どういうこと？」

ヴィントがいった意味が分からず、ヴァンは問いかける。それに對し、ヴィントはどこか輕蔑するかのような口調で言う。

「ここというより、ここに似たような通りはエルザリアのいたるところにあるわ。それが近頃問題になってきてるんだけど……ここは、『怠惰の小道』っていうのよ」

「怠惰の、小道？」

「そう。いくらあんたが世界の情勢に疎いって言っても、天帝が行ってる施策の中に国同士のいざこざで出てくる難民を受け入れてることぐらい知ってるわよね？」

「うん、まあそれくらいなら……」

村に来る旅人や商人も少しはいたし、その人たちからもたらされる情報の中にこの事はあった。

天帝が治めているこの超帝国、ユーティリアも実のところで言えば天帝が全てを治めているわけではない。

大陸の中央に位置するこのエルザリアを中心にして、東と西、南にそれぞれ監督府を設置し、黒、赤、青の王を配して各地を実際に治めている者たちが不穏な動きをしないか、民を苦しめるような施策をとらないかの監視をしている。

ヴァンは知らないが、これは“闇”の時代を抜ける際にゼノンは元々その土地にいる領主達を味方につける必要があり、領主達もまた天帝の勢いや“闇”からの脱却を求める民たちの声に応えざるを得ない事情もあったため、その地位の保障と引き換えに監督を受け入れていた。

そのためユーティリアは、実際に政策を行う領主と、その領主を監督する王たちという二重の政府によって治められている。

「それで勝手なことやった領主を懲らしめたり、未だにユーティリアにちよっかい出してくる他の国を相手にするのも天帝や王達がやってるんだけど、でもそのせいで出さなくてもいい犠牲まで出ちゃうときがあつてね」

「……」

「そういった人間をさっき言ったとおり、受け入れたりしてるんだけど……それがどうも過保護みたいになっちゃってるのか、何もしなくなっちゃったのよ」

「何もしなくなった？ どういうこと？」

「そのままの意味。天帝が庇ってくれる状況に甘えて、エルザリアに来たはいいけど働いたりする気力もなくなったらだと暮らしてるってわけ」

「……はあ！？ な、なんだそれ！ どうしてそこで甘えることになるんだ！？」

意味が分からず、回りの事を忘れて大きな声をあげるヴァン。

「さあ？ あたしには分からないけど、本人達にしてみれば当たり前みたいね。故郷を失ったとか、家族を失ったとか大きい声でいつも言ってるし、それを防げなかったのは天帝のせいだっていつも言ってるわよ。自分達は何もしない癖して、ね。そんな奴等が居座って付けられた名前が——『怠惰の小道』ってわけ」

ヴァンはそこで、盗賊達の言っていた事を思い出した。

「そ、そんな……防げなかった事は確かに悪いことなのかもしれないけど、だからって！」

「そうよね。ヴァンの言いたいことも分かるわ。……はつきり言つて、あたしもこいつらがなんでこんな恥知らずなことが出来るのか分からない。でも、」

指差して、今いる通りを指す。

「ここにいる連中はそうは考えない。他人の受け売りだけど、こんな風に人を大勢養つて普通ならお金が足りなくなっている状況でも巧く切り盛りして、まるで政治に悪影響を出さずに天帝はエルザリアも、ユーティリアも繁栄させている。そのせいで、どうも天帝や王達がいれば全てが大丈夫とかいう変な考えが広まっちゃってるみたいなのよね」

「……」

「文句を言ってるここの連中も、たぶん腹の中では天帝ならいくら悪口を言つても見捨てないつて下種な考えがあると思うわ。……まあ、今の状況があるのはそりゃあ天帝達がいるおかげだし、そう考えるのも無理はないのかもしれないけどね」

口では納得しているかのように言うヴィント。しかし、声に混じる苦味は隠し切れていない、いや、隠すつもりもないのだろう。

「……そんなの、間違つてる。助けてもらってるんだから、そんな一方的に責任ばかりせめるのなんておかしいよ」

「あんたならそういうだろうと思つてたわ。ま、それが正しいとあたしも思ふけどね。けど実際、ここ以外の人間からも不満が出てから早めに何とかしなくちゃいけない問題ではあるわ。治安に悪い影響与えてるつて話だし、それに移民だらけつて言うのを利用して」

一旦そこで間を置き、そして軽蔑どころではなく侮蔑の、毛嫌いでもしているかのような声で、彼等の名を言う。

「こいつ等にまぎれて、『破戒者』が潜り込んでるつて噂もあるわ」

天の都エルザリア ― “闇” より生まれしモノ達1 ―

「『破戒者』が!？」

驚きの声をあげるヴァン。しかしそれもそのはずだ。

破戒者とは、ある魔導士の集団だ。しかしそれはユーティリアに、いや、全ての生きるものにとって忌むべき存在といえる者たちでもある。

そう。彼等は、“闇”を作り出した魔導士達の生き残りだ。

ゼノン達が戦いに勝ち、闇の時代を終わらせたといっても彼等の全てが消えたわけではなく、現在でも生き残りがその卓越した魔導を用いて暗躍し続けている。

「そーよ。だから対策も立ててなんとかこの通り自体無くせないか頑張ってるって話なんだけど……」

そこまで言いかけたヴィントは、ヴァンには聞こえない声で「でもそうもいつてらんなくなってきたんだよねえ……」と呟いていた。

「だからとつと出たいの。ここの通りの連中に目を付けられるのもいやだし、もし噂が本当で破戒者なんかと鉢合わせなんかしたくないでしょ？　いくらあんたが騎士を目指してるって言っても、実力不足なのは否めないんだし」

「……」

ヴァンは渋々、といった様子で頷く。散々ヴィントに言われただけに、そして失態があっただけに従わざるを得なかった。

「分かればよろしい。それじゃあ、すぐにここを」

出よつかと、そういいかけたときだった。

「!？」

突然ヴィントの顔色が変わる。そしてヴァンに飛び掛って頭を掴み「伏せて!」

と叫んで、ヴァンと一緒に地に伏せた。直後、

街の一角で、爆発が起きた。

いきなり地に伏せさせられたヴァンは何が起こったのか分からなかったが、爆発を見て気付く。ヴィントは、爆発の衝撃から庇ってくれたのだ。

「あ、ありがとう……でも一体なんだ!？」

礼を言っ、すぐに視線を爆発があつたほうに移す。

どうやら街角の一つの建物、かなり大きくどうやら元々何かの集会のために作られたもの様だ、の中でそれは起こつたらしい。炎は上がっていないが、ガラスや木片が通りに飛び散っている。そしてその通りには、ここの住人が何事かと集まりかけていた。

ふと、そこでヴァンは気付く。建物から感じられる、魔力の湧き上がりに。そして爆発が何によって引き起こされたのかに。

(これ、魔導で起こされた爆発……?)

しかし間違いはないと思えた。学校で習った術式の中に『エクスプロージア暴爆』という攻撃用の魔導がある。多少のアレンジは加えられているものの、僅かに感じられた魔導の術式からその式が見えたのだ。

(けどなんでこんなところで魔導、しかも殺傷力が強い『暴爆』の術式なんて……)

それが分からない。だが、これ以上考える暇を運命はヴァンに与えてくれなかった。

いきなり建物の中から、大勢の人影が出て来たのだ。

顔を仮面で覆いその表情は何一つとして知れない。そしてその手には、短い刃渡りの双剣が握られている。沈黙のままに動くそのさまは、まるで人間らしい感情が感じられなかった。

「な、何だあんたら!？」

「ここは俺たちの住んでる場所だぞ! それなのにこんな騒ぎを起こして……」

「さっさとその物騒なものをしまつて出てつてくれ!」

通りの人間達が騒ぐ。しかしその人影は彼等には何も答えず、あろうことか——彼等に切りかかっていったのだ！

これにはヴァンも黙っていられなかった。「ごめん！」と言ってヴィントを押しつけ、割って入ろうとする。

だが絶対的に距離が遠い。このままでは犠牲者が出てしまう、ヴァンがそう思ったとき

「え!？」

これもまた突然に、通りのいたるところから新たな人影が現れて、割って入っていった。

途端、通りに響き始める撃剣の音。

新たに現れた人影の方は、双剣ではなく短剣を手に持っている。黒装束を身に付けており、胸鎧や小手、額当てもまた全て黒で統一されていた。

ぽかんとして、二つの人影が争う様を見るヴァン。さつきまで心配すら感じなかった。恐らく気配を消すことと併用して隠式も使っていたのだろうが、それにしてもこうまで感じさせないなんて。

しかし彼等の闘いをしばらく眺めていたところで、ヴァンははつと我に帰った。

（っ！ そうだ、呆けてる場合じゃない。まだ何がなんだか分からないけど、ともかく通りの人たちを守らないと！）

首を振って気を入れなおし、腰にかけている剣に手を置いて走り出す。

頭の片隅に仮面の集団について、もしかしたらと言う考えは浮かんでいたが、それよりも目の前で起きていることを見過ごせないという気持ちが強かったため、それは省みられなかった。

一方、一部始終を見ていたヴィントは額に手を当てて「あっちゃあ……」と苦い顔をしていた。

「参ったな。今日だっていうのは知ってたけど、まさかこの通りだったなんて……しかも早速注意されたの忘れて突っ込んでるし」
「やれやれ、と首を振る。しかし、口に出している言葉とは裏腹に

その目には楽しげな光が浮かんでいた。

「これも運命かな……まあ、こうなっちゃったからには仕方ない。釘を刺すつもりで言っただけだし、反省してるんだっただら少なくとも足手まといにはならないよね。それどころか、もしかしたら……」

「ほんとと、二三回軽く飛ぶヴィント。
「いい機会だから見極めさせてもらうよ、ヴァン。あんたがどこまで、自分の言った事を貫けるかをね」

そして最後に跳んだ後、ヴァンに続いて走り出した。

既にあたりは混沌としており、乱戦の様相を呈していた。

「民間人を守る事を最優先だ。一人でも守れなくば、その時は我等の敗北と思え！」

黒装束たちのリーダーと思しき人物が檄を飛ばす。彼等は個々に仮面の集団を食い止めており、今のところ通りの人々に被害は出ていない。しかし、状況の変化次第では凶刃が人々に及ぶかもしれないだろう。

（そうさせないためにも……！）

未だに彼等がなんなのかは分からないが、しかし黒装束たちは通りの人々を守ろうとし、そして仮面の集団は人々を手につけようとしている。ならば、どちらの味方をすればいいのかは一目瞭然だ。

ヴァンは仮面の集団に打ちかかっていく。同時に黒装束たちを巻き込まないように天雷の術式も展開させ、発動させた。

薄闇に雷鳴の光が瞬く。それに焼かれて倒れていく仮面たち。

「魔闘を扱えるとは、何者だ！？」

「だがここはそれだけで通用するほど甘くはない」

「危険だ、下がっている！」

突然現れたヴァンに、黒装束たちは誰何と警告の声をかけてくる。それに対してヴァンは「僕も手伝わせてください」と答え、仮面の集団の一人を斃しつつ「足手まといにはなりませんから！」と続けて叫んだ。

ヴァンの腕を見て口だけではないと知ったためか、どうしていい

のか分からず迷うそぶりを見せる黒装束たち。味方が増えるのはありがたいが、しかし勝手に動かれると困る。そんな考えが彼等の頭によぎっているのだらう。だが、そこで

「馬鹿なこと言ってんじゃねえ!!」

と言う、やけに大きい声がヴァンの耳を打った。

直後、爆発が起きた建物の一部が壊れ、新たな人影が飛び出してくる。

一つは仮面の集団で、かなりの数だ。もう一つは、彼等の一人に槍を突き刺している、ヴァンと同じくらいの、黒髪青眼の青年。その彼が身に付けているのは――

（従騎士の騎士^{サイ・コート}外衣、だって!?!）

そう、従騎士の地位を示す紋章が入った外衣を彼はまとっていた。そして同じ様に紋章が入った鎧をその上に身につけている。そのことから、

（じゃあまさか、ここにいる黒装束の人たちって、騎士団の人間なのか!?!）

という推測が立つ。だが、大声を出した従騎士は彼の考えなどお構い無しにまた大きな声で叫んだ。

「俺達は手前等を守るために戦ってるんだ! それなのにお前みたいな無駄なお節介が混じると迷惑なんだよ! さっさと引っ込んでろ!!」

あくまでヴァンを民間人と見て引かせるつもりらしい。

その言葉は一理あるのかもしれないが、しかしあまりにも一方的な言い草にヴァンは腹が立った。剣を振るいながら言い返す。

「そこまで言う必要はないじゃないか! それに僕だって、集団で戦うときは勝手な行動しちやいけないことぐらい知ってる!」

「だったら尚更引っ込めよ! そもそもお前やってることそのものが勝手な行動なんだってわかんねえのか!?!」

従騎士は刺さっている槍を相手に蹴りをくれることで抜き、ぐさま振り回して切りかかって来ていた仮面たちをなぎ払った。

なかなかの手際だ。どうやら従騎士の騎士外衣を与えられるだけはあるらしい。しかし、腕に感心しても言われたことに納得できるかは別だ。

「分かってるよ。だからあんたたちを率いてる人に会って、指揮に入ろうとしてたんだってば！ それに民間人を守るって言うなら、少しでも人手があつたほうがいいだろ！」

「人手が増えたって使えなきゃ意味がねえよ！ 善意の無駄なお節介のほうがよくばど厄介だ！ 余計な手間が増える！」

「な、そこまで言う……って、危ない！！」

切り結んでいた相手を突き飛ばして距離をとり、従騎士のほうに駆け出す。

従騎士は、その得物を仮面の一人に突き刺したまま固まっていた。しかしそれもそのはず。槍で突かれた仮面は、なんと両の手で槍を掴んで抜かせまいとしていたのだから。

その隙を見逃さず、横から、背後から仮面たちが飛び掛ってきていた。

だが、不利な状況にあつても従騎士は動じない。ハ、と仮面たちを逆に鼻で笑い

「それで俺の手を封じたつもりってか？ ……舐めんじゃねえ！！」
と大喝して、野生的な雰囲気を持つその顔に獰猛な笑みを浮かべた。すると、突如として空間に魔導の発動を現す文字が浮かぶ。

これにはヴァンも驚いた。術式を組むのが速い、いや、速すぎる。隠式で隠している様子も無かつたし、それに例え父親のように一つの系統に絞って魔導を学んでいたとしてもあの速さは異常だ。一体あの速さは何なのか。

魔導が発動する。組み上げた式は『フレイムウォール炎壁』。

「燃えつきやがれ、クズ共！！」

従騎士の言葉と共に、炎が飛び掛つてきた彼等の眼前に立ち上がる。まともに突っ込んだ仮面たちは炎に焼かれ、大半が動かなくなる。

しかし、それでもまだ生き残りがいた。先に飛び掛って行った者たちより、後に続いていた者たち。彼等は炎に包まれることを避けており、彼等は勢いをそのままに、未だ槍を抜くことができない従騎士に殺到しようとする。……だが、

「させるかあ!!」

そこに、ヴァンが間に合った。従騎士の背に回り、仮面達の殺到を剣を振るって追い払う。続けて魔導を発動、小規模ながら『天雷』を放って追い討ちをかける。

間一髪。まさしくこの言葉通りの状況だった。

そこでようやく従騎士は槍を抜くことが出来る。しかし舌打ちして、「余計なことしやがって」と毒づくのは今まで言い争ってきた彼らしい、と言ったところなのだろうか。しかしヴァンは黙っていられるわけが無く、早速言い返す。

「まだそんな事を言うのかよ!? さっきなんてかなり危ない状況だったじゃないか!」

「ハ、あんなの危険の内に入るかよ。いざとなりやあ槍を手放して逃げればよかったんだからな」

「……へらず口ばかり叩いて。少しは感謝したっていいのに……」
「減らず口なんぞ叩いてねえよ。俺は本当のことしか言ってるねえんだからな。……つつても……」

そこで従騎士は言葉を切り、周囲に目を走らせた。辺りには新たに建物の中から出て来た仮面たちが加わり、二人を囲っている。それを見て、再度舌打ちをする。

「手間取ったせいだ。すっかり囲まれちゃってやがる。……おい手前、名前はなんつうんだ。教えろ」

「……何、いきなり……ヴァンだよ」

「俺はアルバートだ。長かったらアルでいい。……腹が立つが、こうまで囲まれてるとなるとあまり無駄なことをしてられねえ。俺一人だったらまだ何とかなったが、てめえが余計なことすると無駄な手間がかかるんだ」

「相変わらず腹が立つ言い方だけど……それで？」

「……今までの戦いを見て。お前はちったあ腕が立つことは分かった。最低、俺の背中を預けられるくらいはな。だから聞くぞ。俺の指示に従って動けるか？」

「……」

「もし指示に従えねえつうんなら、別にいい。勝手にしろ。俺も勝手にやる。だが指示に従えるってんなら、お互いの死角を庇いながら動くことが出来る。てめえが生き残れる確率もあがるだろう」

「……なるほど。つまり協力しろってこと、だね」

「ふざけんな。俺一人でも足りるのを手前みてえなお節介がいるせいでややこしくなってるだけだ。……で、どうすんだ。やるのか、やらねえのか」

「そんなの決まってる。……やるよ。あんたは腹が立つけど、そう

いう風なことを言ってくれるんなら従わない理由なんか無いんだし」

「そうかよ。ならいい。……それなら」

「うん——行こうか——」

二人は武器を構えなおし、襲い来る仮面たちを迎え撃った。

天の都エルザリア ― “闇” より生まれしモノ達2 ―

お互いの死角を庇いつつ、二人は奮迅する。

アルバート、アルは槍の長さを生かして敵を近づかせず、ヴァンは懷に彼の懷に潜り込んできた敵を迎撃した。

「おい、ヴァン！ 俺の後ろにこい！」

「分かった！」

入れ替わり立ち代り、二人は位置を変えながら戦い続ける。

「さつき『天雷』使ってたよな。だったら俺が炎で敵を一箇所に集めてやる。そこで」

「発動させるって言うんだね。じゃあ、頼んだ！」

剣が腕を飛ばし、槍が体を突きぬける。炎は盾となり、彼等を守って敵を追い詰める。そこに、作り出された雷は刃となって敵を貫いた。

二人は即席だというのに良く連携していた。仮面たちは隙を作ろうとして波状攻撃を仕掛けるが、それすらも炎と雷撃、槍と剣の得意範囲を生かした防御によって阻まれてしまう。

自然、仮面たちは攻めあぐねて動きが遠回りなものになる。

ここで、逆に今度はこちらが攻め込んでやろうかと考えた、そのときだ。

「おお兄貴！ 無事ですかい！？」

「待たせちまつて申し訳ねえ！」

「アル、大丈夫か！」

囲っている外側、しかも建物の入り口の方から新たな声がかつてくる。見れば、そこには新たに五人の騎士が出てくるところだった。そしてその中には、なんと従騎士ではない正規の騎士までいた。

彼は大柄な体に青の塗装がされた騎士外衣と全身鎧をまとい、頭

も魚の魔獣の意匠が施された全面兜をつけていた。武器には長身の戦斧を携えている。

新たな敵が出て来たことに反応し、困っている仮面達の何人かが彼等に向かう。だがそれは、

「——おおおおお！——！！」

戦斧を振りかぶり、そして全力で振りぬいた一撃で近寄ってくる敵をいとも簡単になぎ払ってしまった。しかも、その大振りの後に生じた隙は

「甘い！」

大振りの反動を利用した拳打によって補っていた。

たかが拳打と侮ってはいけない。大柄で重量があり、しかも戦斧を振り回せるだけの力をもった者が金属製の籠手で包んだ拳を繰り出してくるのだ。一撃の重さは、鈍器で殴られたものと匹敵するだろう。

（やはり、すごい……）

その戦いぶりに、思わずヴァンは感嘆する。流石騎士位に就いているだけはあると思えた。

ヴァンの横で、アルは彼等に文句を言う。

「遅えぞ！ 何てこずってやがった！」

「すまねえ、敵の数がやけに多かったんで。それに奴等も結構な数がいやがる。魔導をばかすか撃つてきて近寄れねえんだ」

彼等は囲みを突破し、二人を庇うように展開する。その中で騎士は一人だけ、ヴァンとアルに駆け寄ってきた。

「そのせいですぐに片付けるつもりだったのが予想外に手間取ってな。外に出そうな連中がいたからとお前を向かわせたが、どうも見積もりが甘かったらしい。どこか怪我はないか」

「いや、ねえよ。ピンピンしてるぜ。もっとも、余計な手間はかけさせられたがな」

ちらりと、目でアルバートはヴァンを指す。騎士もまたヴァンに目を向け、そして「民間人か！？」と驚いた顔になった。

「どうしたアル。民間人を戦いに巻き込むなどおまえらしくも無い」
「俺だって巻き込みたくなかったさ。だがこいつが勝手に首突っ込

んできやがったんだ。しかも余計な節介焼いてきたせいで囲まれて、仕方ねえからこいつに指示してさっきまで奴等とやりあってたんだよ」

「ちよつと待った。囲まれたのは僕のせいじゃないだろ！」

聞き逃せない言葉があつたため、即座に口を挟む。

「そもそも僕が助ける前から囲まれてたじゃないか。言いがかりは止めてくれよ！」

「知るかそんなもん。手間取らせたのは手前だから、囲まれたのも手前のせいだ」

「なにその理由！？ それに手間取らせたって何に手間取らせたんだよ！？」

「そんなもん決まつてる。口でだ」

「言い合つてるだけで手間取つたつて言うなんてなんていい草だよ！？」

余裕ができるや否や、また口喧嘩を始める二人。

それを騎士はというと、だが、興味深げに「ほう」という感嘆の吐息を漏らしていた。同時にヴァンを見る視線も幾分か違ったものになる。

「さて、アル。つまり、お前の言い草はどうあれさっきまで彼と一緒に戦つていたと言うことか？」

「……ああ」

なぜかそこでそっぽを向いて、肯定するアル。すると騎士はますます興味深げに吐息を漏らした。

「ふむ、なるほどな。……ちよつといいか。君はなんと言う名だ？」

「え。ぼ、僕ですか！？ えっと、ヴァン、ですけど……」

いきなり騎士に名前を問われ、動揺しつつも何とか答える。

それに騎士は頷き、パチリと首にある止め具を外して兜の前面を押し上げた。

中から出て来たのは南方の出を表す色黒の肌を持った、精悍な顔つきをした男性の顔だった。目と髪は茶色をしており、顔かたちは

ごつごつと角ばっていて頑強そうな印象をヴァンに与えた。

「そうか、ヴァンというのか。……自己紹介が遅れたな。俺の名前はダゴル。一応天帝の名の下で、騎士を名乗らせてもらっている者だ」

「は、はい。その、お目にかかれて光栄です。騎士様」

「そう硬くならなくていい。少なくとも俺は、こういう場では礼儀に拘らない性質だ。それで物は相談なんだが……よければ、君も俺たちと一緒に戦ってくれないか？」

「……え！？」

ヴァンは飛び上がって驚いた。元々指揮している人間に掛け合っ
て一緒に戦わせてくれるように頼むつもりではあったが、まさか彼
の方から、しかも騎士に言ってもらえるとは……

「ちょ、ちょっと待てダゴル！ 何でそうなる！」

が、そこで納得できないのはアルだ。

「さっきの話を聞いてなかったのか！ 俺がこいつのせいでどれだ
け手間取ったと……」

「聞いていたさ。だからこそ、彼を手伝わせてもいいかと思えた、
ということだ」

「はあ！？ どこをどう聞いてりやそういう結論になるんだ！ 大
体俺は……」

「そこまでです」

横から涼やかな声がかかる。視線を移すと、そこには先程までダ
ゴルが連れてきていた従騎士の一人が立っていた。だが、よく見て
みると

（え、女の子！？）

そうなのだ。眼前にいるのは女性の、しかもこれまたヴァンとそ
う変らない年頃で少女ともいえる年齢の騎士だった。

金髪で鳶色の瞳。顔は滑らかな形を描いて流麗な印象を見るもの
に与えるが、きりと引き締まった表情はその流麗さに凜とした雰囲気
も与えていた。華奢とはいえないが、それでも同じくらいの男性

と比べると細身の体に従騎士の騎士外衣と鎧を身に付けていた。

「イルシュか。そちらはどうだ」

「問題ありません。周りにいる敵は全て片付けました。私以外の者には、勝手ですが指示を出して建物の中にいる者達の支援に向かわせています」

「いや、それでいい。時間を無駄にするわけにもいかんしな。良くやってくれた」

「はい」

イルシュと呼ばれた従騎士は胸に手を当てて一礼する。なんというか、ヴァンからしてみると、堅い。

（こつちとは大違いだ……）

横目でアルを見る。しかし目を移した瞬間、ばっちり目が合ってしまった。どうやら何を考えるのか、予想されたらしい。睨みつけてきた。

「これから大詰めです。中の方々と合流して決着をつけなければなりません。それなのに」

しかしそんな一幕は何も知らないイルシュは淡々と状況を説明し、途中まで来たところでアルに視線を向け

「くだらないことで意見を言い合っている暇などないと考えます。

ダゴル様が戦力の内に入れても構わないと判断したのであれば問題はありませんかというし、何より一刻も早く合流すべきかと」

と言った。

アルがそれに反発しようとする。

「くだらないとはなんだ！　そもそもさっきから言ってるが、俺が……」

「うるさいぞ、アル」

いきなり、ダゴルはアルの頭の上に拳を落とした。ごっつん、という大きな音。続いて「いてええええええ！」という悲鳴が辺りに響く。その様を見てしまったヴァンはというと自分が受けたわけでもないのに痛さが伝わってくるようで頭を抑えていた。

「俺の隊の指揮権は俺にある。その俺が彼を受け入れるといった以上、お前が説得力のない無駄な事を言っても決定は変らん。これ以上殴られたくないのならさっさと受け入れろ」

「~~~~っ！ わ、わかったよ……」

「それでいい。それこそ無駄な手間を使わせるな。……では、ヴァン」

「あ。は、はい！」

頭を抑えていたヴァンは背筋を正し、直立する。

「この場だけになるが、とりあえず君の参加を認めよう。だが、俺の指揮には必ず従ってもらうぞ。いいな？」

「はい。分かっています」

「うむ、ならばいい。……では行くぞ！ この戦いに決着をつける！」

武器を高く掲げ、ダゴルは宣言する。それにヴァンとアル、イルシュはそれぞれ「はい！」「おう！」「はッ！」と返した。

天の都エルザリア ― “闇” より生まれしモノ達3―

「じゃあ、ここにいるのはやっぱり騎士団の人たちなんですか！」

「ああ、そうだ。まあ、ここまでの騒ぎにするまでもなく、片付けるつもりだったが、手こずってな。飛足衛士団ハウンスに万が一に備えて周囲を囲ってしてもらっていたが、正解だったよ」

建物の中に入った彼等は、未だに多く残る敵を倒しつつ内部へと進んでいく。その道すがら、ダゴルはヴァンに何故騎士団がここで戦っているのかを説明していた。

それによるとヴァンが見かけた黒装束の集団も騎士団に属する者たちであり、『飛足衛士団ハウンス』と言う名を持つ彼等は騎士達の伝令、偵察を担当し、場合によっては戦闘もこなすのだという。

今回は街中で乱戦になる可能性を考慮し、この建物周辺に潜んでもらっていたのだそうだ。

「でも、いつの間にあなたたちはこの中に入ったんですか？ 聞いている限りだと結構な数のはずなのに、そんな気配がまったくしなかったんですか……」

「ふふ、種明かしをしたいところだが、それはヴァン、お前が騎士になってから知ることだ。今は、俺たちが現にここにいるということだけ頭に置いておけばいい」

にやりと笑い、ダゴルは、しかしそこで足を止めた。

「そして……他の場所で戦っている仲間達と同じく、こいつらを倒すことに全力を注いでくれ！」

武器を振りかぶり、新しく現れた仮面の集団に向かって突っ込んでいった。ヴァンたちも同じく、彼に続いて突っ込む。

金属音が再度響き渡り始める。いや、建物全体からもそれは鳴り響いており、騎士たちの戦いの激しさを物語っていた。

「……ふっ！」

鋭い呼気を吐いて、イルシュは手に持った細剣を突き出し、狙い

過たず敵の胴を貫いた。そして素早く引き抜き、付け入る隙を作らない。ヴァンは細剣遣いを初めてみたが、従騎士になるだけはあると感じるほどに彼女の剣捌きは堂に入っていた。

（着ている騎士外衣は伊達じゃないってことか）

女の子だと思って、甘く見るなんて間違ってもしちやいけないみたいだなと思う。

アルもダゴルも相変らずの調子で敵を倒し続けている。ヴァン自身も順調だ。即席の連携ではあるが、十分通用している。このままなら、敵を突破するまで到達するのもそう時間はかからないだろう。それにしても、とヴァンは思う。ちらりと、彼は周囲に倒れている敵を見る。

彼等は、よく見てみると血を流していなかった。その代わり、破れた服の合間から金属の光沢が見える。

相手をしていて、どうにも違和感があつたのはこういうことだったのかと納得する。

（まさか、こいつらが人形だったなんて……）

ダゴルから彼等が戦っている相手についても説明してもらい、その中で人形達のことと説明されたが、未だに驚きが胸の中に残っている。

魔導で操る人形があるのは知っていた。だがゴーレムに代表されるそれらは、目の前で動いていた者たちのように機敏な動きをすることはできない。しかも話を聞く限りでは、この人形達は術者一人でも十体もの数を動かすことが出来るようになっていたらしい。

幸い人形の構造自体はそれほど強度のあるものではなく、普通に切ったりすることはできる。また、内部に仕込まれた術式を壊すことでも動きを止めることができるようだ。先程イルシュが突きで人形の動きを止めたのも、魔力の供給源を貫いたからだろう。

（でも僕は、人形から魔力を感じなかった……それだけうまく隠されていたってことなのか？）

ヴァンはそれなりに魔導に関して自信を持っている。正式な魔導

士ほどとはいわないが、魔力を感知するにしても腕におぼえはあった。だが、その自分がまるで見抜けなかった。

確かに人形に魔力が供給されていることが分ければ、その魔力を辿って術者の元へ辿り着くこともできるかもしれない。そういう意味では魔力を極力相手に悟らせないようにする事は理にかなっていることではある。

しかし、魔導士としての修練を積んだ自分にこうまで感じさせないとなると……

（相手はそれだけ高度な隠式を使えるということになるか……）

そして、自分達を上回る魔導についての知識を持っていることも恐らく確実だろう。

彼等四人は通路を走りつている。飛足衛士団の報告では、建物内のほかの場所で戦っている味方の部隊も確実に敵を減らしてきているらしい。決着は、もうじきつくだろうとのことだった。

だが、その報告を聞いても不安が湧き上がってきてしまうのをヴァンは抑えることができないでいた。

「……ひでえ面だな」

隣で走っていたアルが、見かねたかのように声をかけてくる。もっとも、中身は相変らずヴァンを戦いから離れると言っているようなものだった。

「不安でしょうがねえって顔してるぜ、お前。やっぱり参加しなけりゃ良かったんじゃないのか」

「……まだそんなことをいうのか。まあ、不安なのは認めるけど、でもここでやめるくらいならそもそも参加なんかしないよ。それこそここに入る前に逃げてるさ」

「ならいいが……あれだけ大口叩いておいて逃げましたなんてやったら俺がたたじゃおかねえぞ。憶えとけよ、ダゴルは認めても、俺は認めてねえ。邪魔だと思ったら即刻めえには退場してもらっからな」

「そうになったら、ね。もっとも、そんなことにはならないだろうか

ら、余計な心配はしないほうがいいと思うけど……ん？」

「？ おい、どうした？」

「いや、この先の通路なんだけど……なんだか、強い魔力を感じる……？」

そういつて、魔力を感じた方向を見る。

すると通路の奥、その左手にある部屋が目に入ってきた。そこからは何度も光が瞬き、爆音が響いている。あれは……魔導による電撃や、爆発か！？」

「チ……もう始まっていたか！ 急ぐぞ……！」

ダゴルが焦った様子で皆に促す。そして、辿りついた部屋では「ああああああああああ……！」

爆発によって、足を吹き飛ばされた従騎士の絶叫が木霊していた。

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n8647b/>

アウグストゥス

2010年10月11日05時08分発行